

学生と教員を対象とした
生成AIの教育利用状況と意識に関する
2026年全国調査
— 2024年～2026年比較調査 —

2026年10月

仙台大学

AI教育研究チーム

- ・ はじめに 1
- ・ 2026年度調査概要 2
- ・ 本調査のサマリー 3
- ・ 総括 8
- ・ 学生と教員の生成AIの利用状況 9
- ・ 学生と教員の生成AIの教育・学習利用に対する意識 ... 28
- ・ 教員の生成AIによる教育上の課題 40
- ・ 学生の生成AIを利用した学習上の問題行動と課題 ... 47
- ・ 調査結果に対する考察とこれからの学びに向けた提言 ... 57～58

生成AIの普及を踏まえた教育環境の整備——3年間の全国調査から

生成AIは、文章作成や情報収集、教材準備など、学習と仕事のさまざまな場面で利用されるようになった。多くのサービスが学校の外でも利用できるなか、教育には、利便性を学びに結び付けるとともに、誤った出力や情報管理上のリスクに対応し、**学習者自身の思考と判断を支える環境の整備**が求められている[1・4]。

日本では、文部科学省が2024年12月に改訂した初等中等教育向けガイドライン(Ver.2.0)で、**人間を中心に据えた活用**と、生成AIの存在を踏まえた**情報活用能力の育成**を基本的な考え方として示した。活用そのものを目的とせず、学習目標への有効性を吟味し、発達の段階に応じた配慮とリスクへの対策を行うことが重視されている[1]。

大学・高専についても、同省は2023年7月、各校の教育の実態に応じた主体的な対応と、状況の変化を踏まえた指針の見直しを促した[2]。こうした方針を実践につなげるには、**利用を認める範囲や評価基準の明確化**に加え、教員研修、学習支援、個人情報の保護を組み合わせた**組織的な対応**が必要である。

海外でも、活用と安全性を両立するための取組が進む。豪州の学校向け生成AI枠組みは、教育・学習の支援、公平性、説明責任、プライバシー・安全性などを原則に掲げている[3]。また、OECDの2026年報告書は、AIを使って課題をうまく仕上げるのが、**必ずしも本人の学習につながるわけではなく、明確な教育目的に基づく活用が重要だ**と指摘している[4]。

仙台大学AI教育研究チームは、2024年、2025年に続き、2026年も学生と教員を対象とする全国調査を実施した。本報告書は**学生5,706人、教員2,384人**の回答を基に、利用状況、教育・学習への期待と不安、知識や行動、教育現場の課題を捉え、**過去2年との比較**から変化と継続する課題を整理したものである。

本調査では、利用が広がる一方で、引用や検証方法を知っていると答えた利用学生は、**いずれも約4割にとどまる**。**生成AIの利用拡大が教育・学習に及ぼし得る影響を考慮し**、学生と教員、学校種による違いを踏まえて支援を検討することが重要である。学習者が**自ら問いを立て、根拠を確かめ、判断する力**を育てるために、本報告書が学校・大学、家庭、教育行政の対話と環境整備の基礎資料となることを願う。

仙台大学 AI教育研究チーム

参照資料（スライド下部）

- [1] 文部科学省（2024年12月26日）『初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）』。
- [2] 文部科学省（2023年7月13日）『大学・高専における生成AIの教学面の取扱いについて（周知）』。
- [3] Australian Government Department of Education（2023）Australian Framework for Generative Artificial Intelligence in Schools.
- [4] OECD（2026）OECD Digital Education Outlook 2026: Exploring Effective Uses of Generative AI in Education. OECD Publishing.

項目	内容
調査目的	2024年・2025年に続き、学生と教員の生成AIの利用状況、知識・行動、期待と不安、教育現場の課題を把握する。比較可能な共通項目について3年間の推移と学校種別の違いを整理し、授業・評価の改善、教員研修、利用環境整備の基礎資料を得る。
調査対象者	生徒・学生：高校生相当以上の生徒・学生（2026年の調査配信対象は15～22歳）。教員：小学校、中学校、高校、高専、特別支援学校、大学・大学院、専門学校等に勤務する教員。
調査方法	全国の登録Webモニターを対象とするWebアンケート。事前スクリーニング後に本調査を実施。2026年の実査は株式会社モニタスに委託。
2024年調査	調査期間：2024年3月21日～25日。総回答者8,769人、除外1,830人、有効回答6,939人（学生4,323人・教員2,616人）。
2025年調査	調査期間：2025年3月12日～19日。総回答者9,044人、除外1,813人、有効回答7,231人（学生4,725人・教員2,506人）。
2026年調査	調査期間：2026年3月13日～25日。総回答者9,383人、除外1,293人、有効回答8,090人（学生5,706人・教員2,384人）。
2026年のデータ処理	注意力確認設問で指定された回答を選択していない回答者、および学校種別・自由記述等から調査対象の条件を満たさないと判断された回答者を除外し、有効回答8,090人を分析対象とした。
集計・比較	学生・教員別、学校種別に回答割合を集計。利用有無や意識等は各属性の回答者全体、利用頻度・用途等は生成AI利用者を分母とした。2026年の生成AI利用者は学生4,581人、教員1,443人。
調査実施者	仙台大学体育学部 スポーツ情報マスメディア学科 AI教育研究チーム 内野秀哲、遠藤教昭、齋藤長行、須田翔大、橋本智明、山口恭正（五十音順・敬称略）

- ・ 学生は8割、教員は6割に達し、利用者内の使用頻度も上昇
- ・ 生成AIの利用率は、学生で2024年30.3%、2025年54.5%、**2026年80.3%**、教員で19.3%、32.3%、**60.5%**と上昇した。直近1年間の増加は**学生25.8ポイント、教員28.2ポイント**に及ぶ。
- ・ 高校生は2025年48.8%から2026年77.9%、大学・大学院生は66.6%から84.7%へ上昇した。両者の差は17.8ポイントから6.8ポイントに縮小し、**高校生にも利用が急速に広がった。**
- ・ 教員では、**中学校29.3%→61.0%**、高校28.5%→55.2%、大学・大学院48.5%→69.1%と、いずれも2025年から2026年に上昇した。この3区分では**大学・大学院が最も高いが、上昇幅は中学校教諭が最大である。**
- ・ 生成AI利用者のうち**週2回以上使う割合は、学生32.8%→65.3%、教員38.4%→64.3%**と、この1年間で大きく上昇した。利用者内では、学生・教員とも約3分の2が週に複数回利用している。

- ・ 課題・レポートや教材作成への活用が進み、学校種によって用途が異なる
- ・ 生成AI利用学生の課題・レポート作成への使用経験は、2024年62.7%、2025年68.7%、2026年79.2%と上昇した。2026年は高校生77.6%、大学・大学院生81.4%で、双方とも8割前後に達している。
- ・ 生成AI利用教員では、「授業資料や教材の作成」が2024年37.7%、2025年40.3%、2026年49.8%へ上昇。「文章の校正」も同じ順で20.2%、28.7%、36.8%となり、授業準備や文章を整える用途が拡大した。
- ・ 2026年の教材作成は中学校52.6%、高校49.9%、大学・大学院46.6%。一方、大学・大学院教員は外国語の翻訳42.9%、研究論文の執筆17.5%で中学校・高校を上回り、学校種による活用の違いがみられる。
- ・ 利用サービスにも違いがあり、Microsoft Copilotは教員30.1%に対し学生10.7%。学生ではChatGPT無料版84.7%が突出し、教員ではChatGPT無料版63.5%とGemini無料版57.0%が高い。

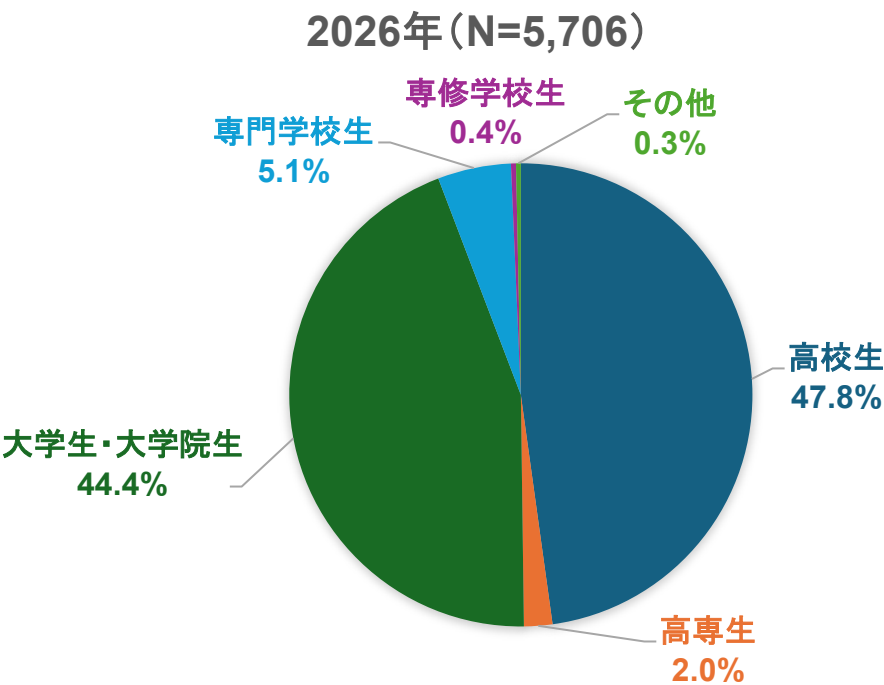
- ・ 不正行為やバイアスの認知に比べ、具体的に判断・引用・検証する知識が低い
- ・ 生成AI利用学生のコピー＆ペースト提出経験は、2024年27.8%、2025年29.7%、2026年32.5%と上昇した。2026年は高校生33.9%、大学・大学院生30.6%で、いずれも約3人に1人が経験している。
- ・ 2026年にコピー＆ペースト提出を不正行為と知っているとの回答は75.8%、バイアスの存在を知っているとの回答は74.6%。一方、不正行為を判断できるとの回答は59.2%、引用方法とファクトチェック方法を知っているとの回答は各41.5%にとどまる。
- ・ ファクトチェック方法の知識は2025年36.0%から2026年41.5%へ上昇した。引用方法は39.4%から41.5%となったが、2024年の42.9%を下回る。2026年も、両設問とも「知らない」との回答が半数を超えている。
- ・ 2026年の不正行為の判断は高校生52.9%、大学・大学院生66.0%、ファクトチェック方法の知識は36.1%、47.7%で、大学・大学院生が高い。ただし引用方法は41.8%、40.8%で、両者に共通する課題となっている。

- ・ 教員の将来への期待は高まったが、依存への不安と現場の課題は残る
- ・ 「自分の将来に役立つ」への肯定回答は、教員で2025年49.8%から2026年61.7%へ上昇した。学生は65.7%から65.2%でほぼ横ばいとなり、学生・教員の差は15.9ポイントから3.5ポイントへ縮小した。
- ・ 一方、学習活動が生成AIに依存することへの不安は、2026年も学生・教員ともに約7割である。学生は2024年65.8%、2025年69.0%、2026年69.7%と推移し、利用への期待が広がっても依存への懸念は続いている。
- ・ 生成AI使用が疑われる不正な提出レポートを問題として挙げた大学・大学院教員は、2024年44.3%、2025年52.8%、2026年64.4%と上昇した。2026年の中学校37.2%、高校38.3%を大きく上回る。
- ・ 教員全体では、抵抗感を問題として挙げた割合が2025年27.9%から2026年21.6%へ低下した。しかし、知識不足を挙げた割合は43.9%から42.4%と4割台が続いており、教員自身の知識は引き続き主要な課題である。

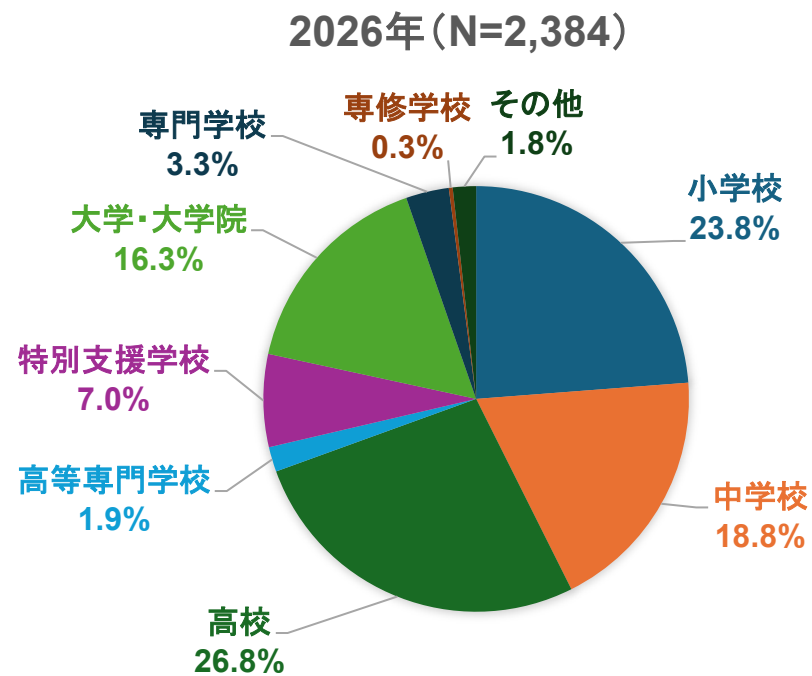
- ・ 個人情報取り扱いと、学校の利用ルール・評価方法が引き続き課題
- ・ 生成AI利用学生の個人情報の入力経験は、2025年14.6%から2026年26.2%へ11.6ポイント上昇した。一方、利用教員は13.7%から12.7%へ低下し、学生と教員で異なる変化がみられる。
- ・ 2026年のオプトアウト設定経験は学生17.3%、教員20.9%で、2025年の15.0%、20.1%からの変化は小さい。「よくわからない」は学生45.6%、教員29.4%を占めている。
- ・ ガイドラインがないことを問題として挙げた教員は、2024年30.7%、2025年30.0%、2026年29.9%とほぼ横ばい。2026年は中学校34.3%、高校30.8%、大学・大学院19.3%で、学校種による差がある。
- ・ 2026年には約7割の教員がガイドライン策定を必要とし、新しい教育実践の検討を求める肯定回答は69.9%、AIを利用できない状況での評価を重視する回答は64.9%であった。回答全体では、活用を前提とする教育実践と、AIに頼らず取り組む評価の双方が重視されている。

- ・ 利用の普及を、学びの質・判断力・安全性の確保につなげる段階へ
- ・ 2024～2026年の比較では、特に直近1年間で学生・教員双方の利用率と使用頻度が大きく上昇した。一方、引用・検証方法を知る学生は4割程度にとどまり、依存への不安や教育現場の課題も残る。利用の拡大と、適切に利用するための知識・対応の充実を分けて捉える必要がある。
- ・ 学校の管理外でも利用できる生成AIが広がる中、文部科学省は人間を中心に据えた活用と情報活用能力の育成を重視し、2026年度も実証や教員研修を進めている。OECDの2026年報告も、AIで課題の出来栄えが向上することと、学習者自身の理解や能力が高まることを区別している。
- ・ 本調査からの示唆として、今後は利用方法の紹介に加え、引用、根拠の確認、個人情報の取り扱いを実際の課題の中で学ぶ機会が重要となる。評価についても、成果物だけでなく、作成過程や本人による説明を確かめる方法と、AIを利用せず理解を確かめる方法を組み合わせることが考えられる。
- ・ 対応は学校種の違いを踏まえる必要がある。高校では不正行為の判断や検証方法の学習、大学・大学院では課題・レポートの評価と引用指導、教員には教材・校務での実践に即した研修が重要である。目指すべき方向は、AIに任せる部分と本人が考え、判断し、説明する部分を明確にし、学びの質を支える教育設計である。

学生と教員の生成AIの利用状況



3年間比較			
学生の種類	2026年 (n=5,706)	2025年 (n=4,725)	2024年 (n=4,323)
高校生	47.8%	51.5%	50.5%
高専生	2.0%	1.9%	1.7%
大学・大学院生	44.4%	36.5%	39.0%
専門学校生	5.1%	3.8%	4.9%
専修学校生	0.4%	0.2%	0.3%
その他	0.3%	6.1%	3.5%
計	5,706	4,725	4,323



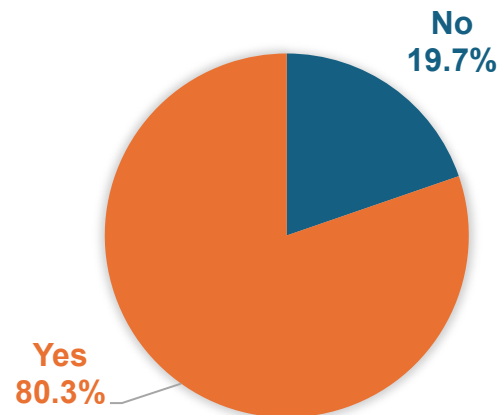
3年間比較

教員の種類	2026年 (n=2,384)	2025年 (n=2,506)	2024年 (n=2,616)
小学校	23.8%	23.9%	23.9%
中学校	18.8%	19.2%	20.4%
高校	26.8%	26.9%	27.9%
高等専門学校	1.9%	1.4%	1.1%
特別支援学校	7.0%	6.9%	0.0%
大学・大学院	16.3%	15.8%	13.8%
専門学校	3.3%	3.8%	3.5%
専修学校	0.3%	0.6%	0.9%
その他	1.8%	1.6%	8.6%
計	2,384	2,506	2,616

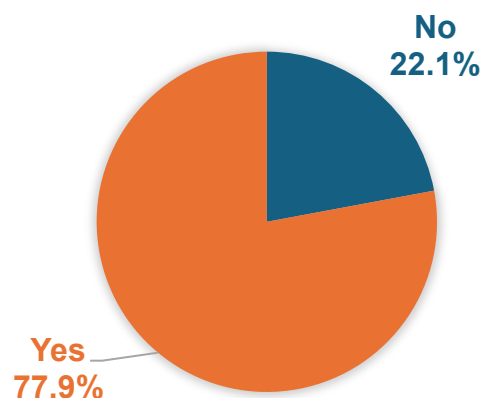
- 2026年は、学生全体の80.3%が生成AIを利用しており、2025年の54.5%、2024年の30.3%から大きく上昇した。
- 高校生でも77.9%、大学・大学院生では84.7%に達しており、生成AIの利用が学生の間で広く普及している状況が確認された。

あなたは生成AIを使用していますか？

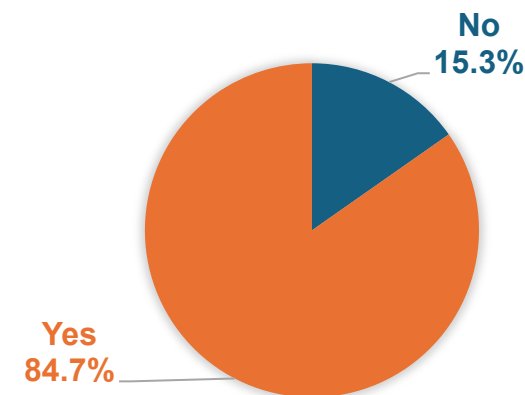
学生 2026年 (N=5,706)



高校生 (N=2,728)



大学・大学院生 (N=2,534)

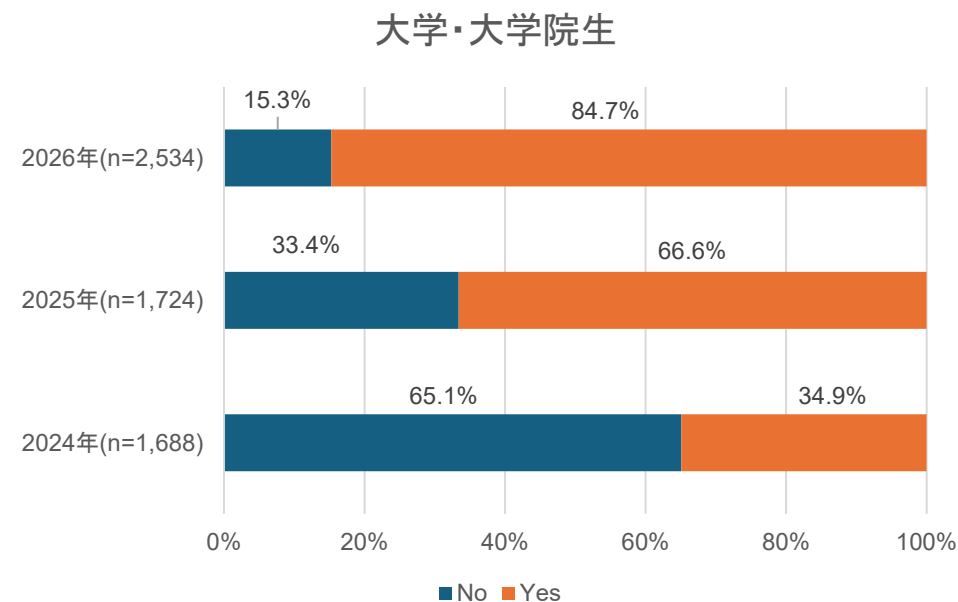
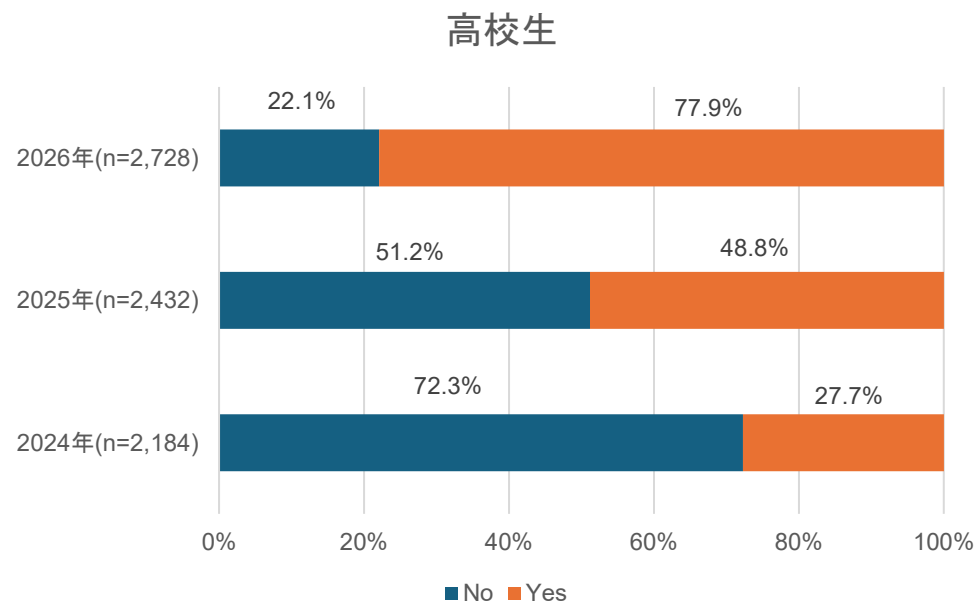


学生の生成AIの利用状況（学校種別年次比較）

13

- 生成AIの利用率は、高校生、大学・大学院生のいずれでも3年間で大きく上昇した。
- 高校生は27.7%から77.9%、大学・大学院生は34.9%から84.7%へ増加し、2026年には両層とも約8割が生成AIを利用している。

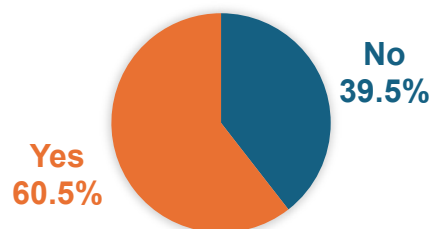
あなたは生成AIを使用していますか？



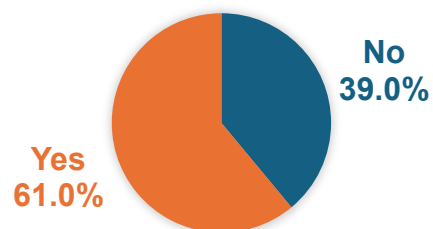
- 2026年は、教員全体の60.5%が生成AIを利用している。
- 学校種別では、大学・大学院教員が69.1%と最も高く、中学校教諭は61.0%、高校教諭は55.2%であった。
- 教員においても生成AIの利用が広がっていることが確認された。

あなたは生成AIを使用していますか？

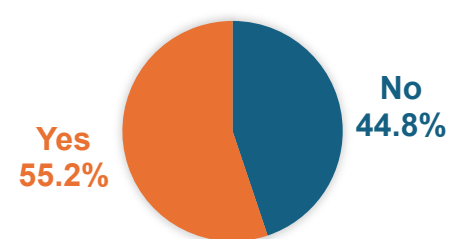
教員 2026年(N=2,384)



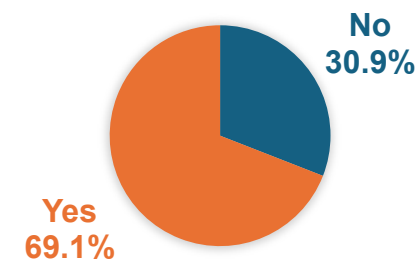
中学校教諭(N=449)



高校教諭(N=640)



大学・大学院(N=388)



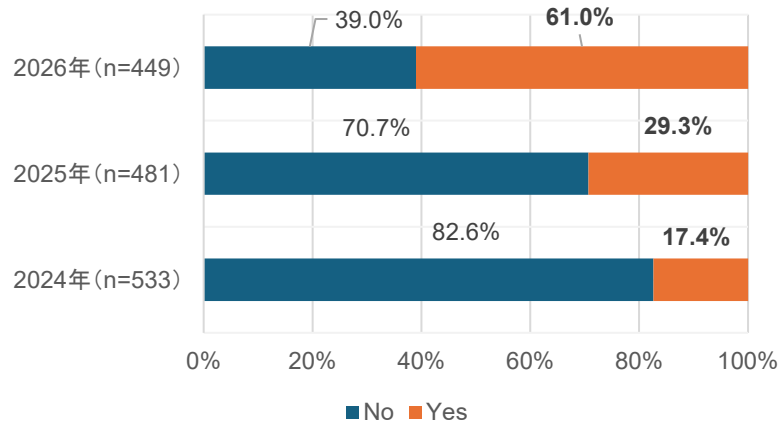
教員の生成AIの利用状況（学校種別年次比較）

15

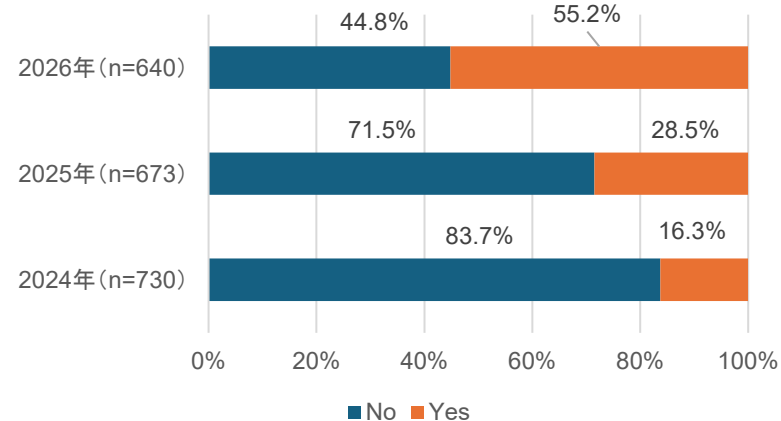
- 生成AIの利用率は、すべての学校種別で3年間連続して上昇した。
- 2024年から2026年にかけて、中学校教諭は17.4%から61.0%へ43.6ポイント、高校教諭は16.3%から55.2%へ38.9ポイント、大学・大学院教員は36.8%から69.1%へ32.3ポイント上昇した。

あなたは生成AIを使用していますか？

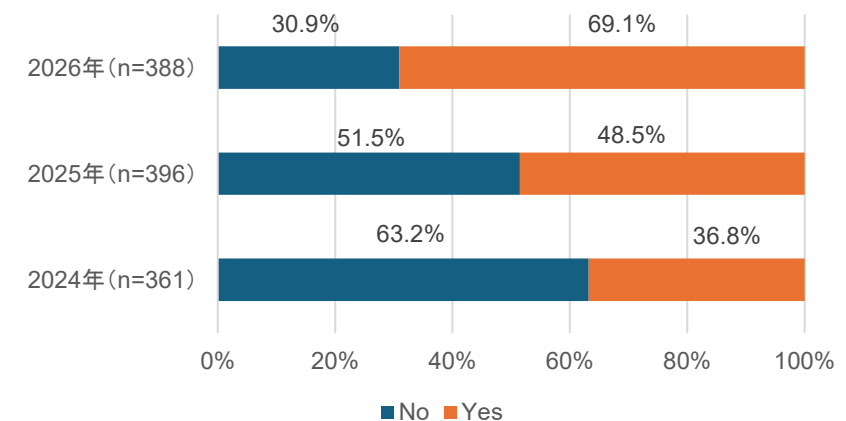
中学校教諭



高校教諭

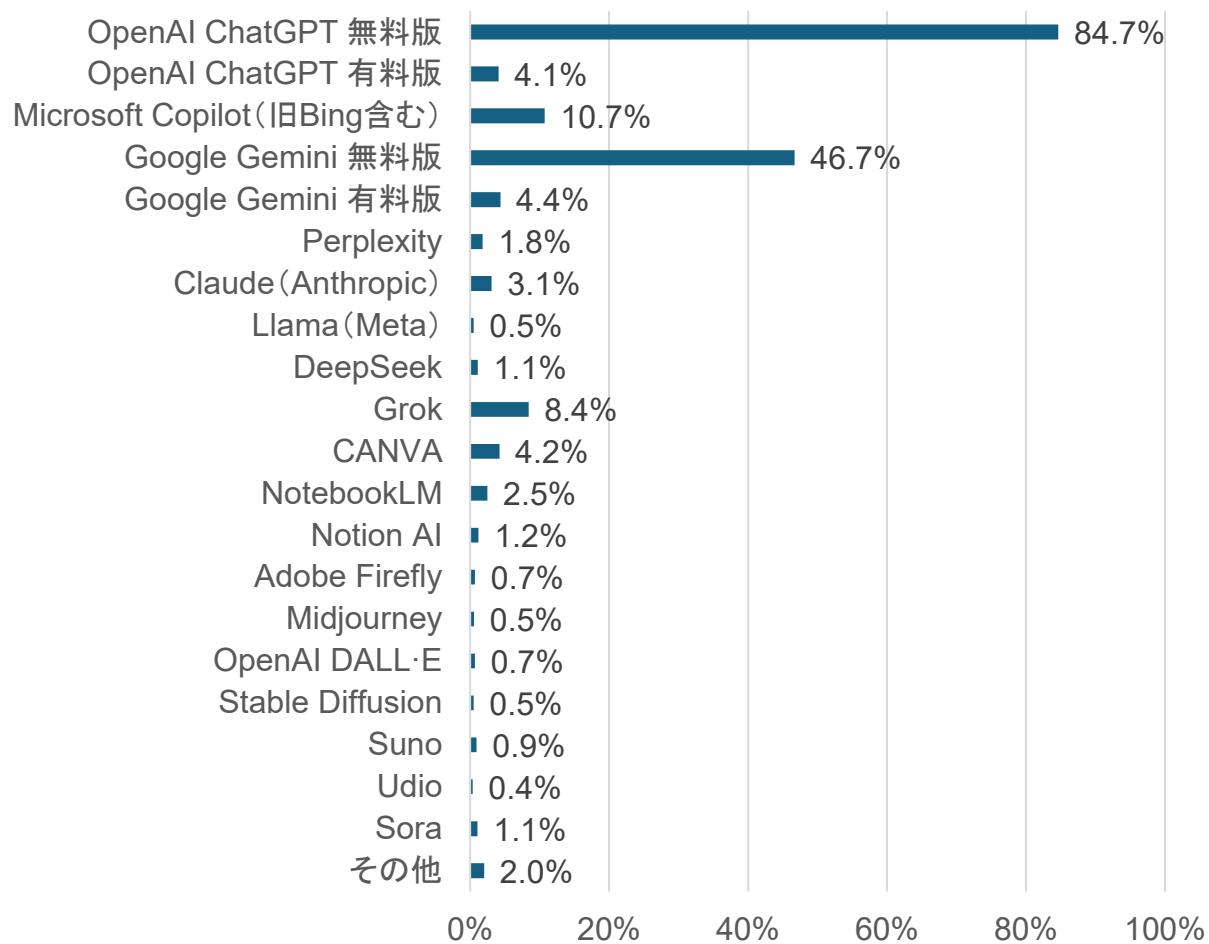


大学・大学院教員



あなたが使用している生成AIを＜複数＞選択してください。

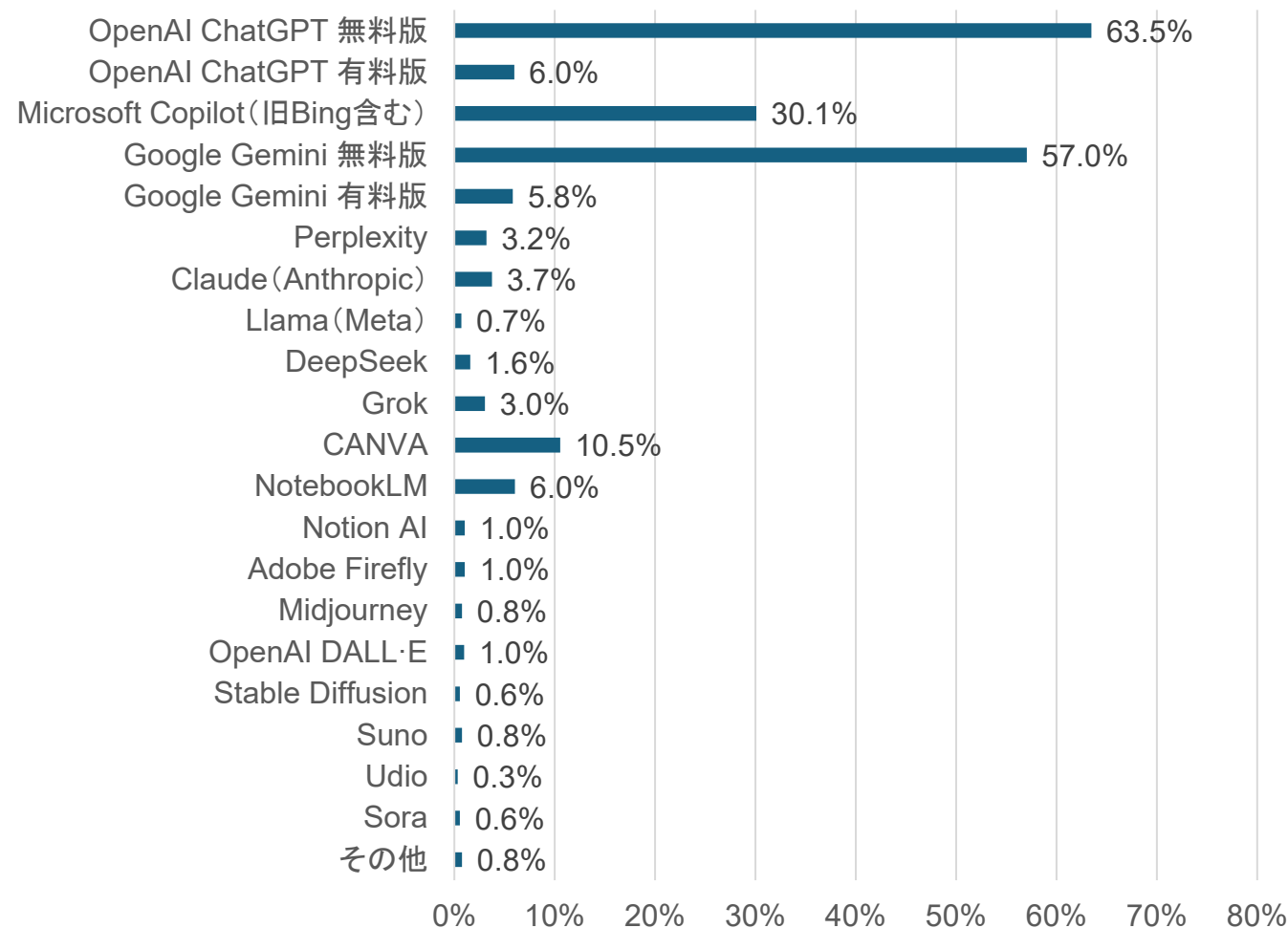
2026年 学生 (n=4,581)



- 学生が利用している生成AIでは、ChatGPT無料版が84.7%と最も高く、次いでGoogle Gemini無料版が46.7%であった。
- Microsoft Copilotは10.7%、Grokは8.4%で、その他のサービスはいずれも5%未満であった。
- また、ChatGPT有料版は4.1%、Gemini有料版は4.4%にとどまり、学生の生成AI利用は無料版を中心としていることがわかる。
- 複数の生成AIサービスが利用される一方、利用率にはサービス間で大きな差がみられた。

あなたが使用している生成AIを＜複数＞選択してください。

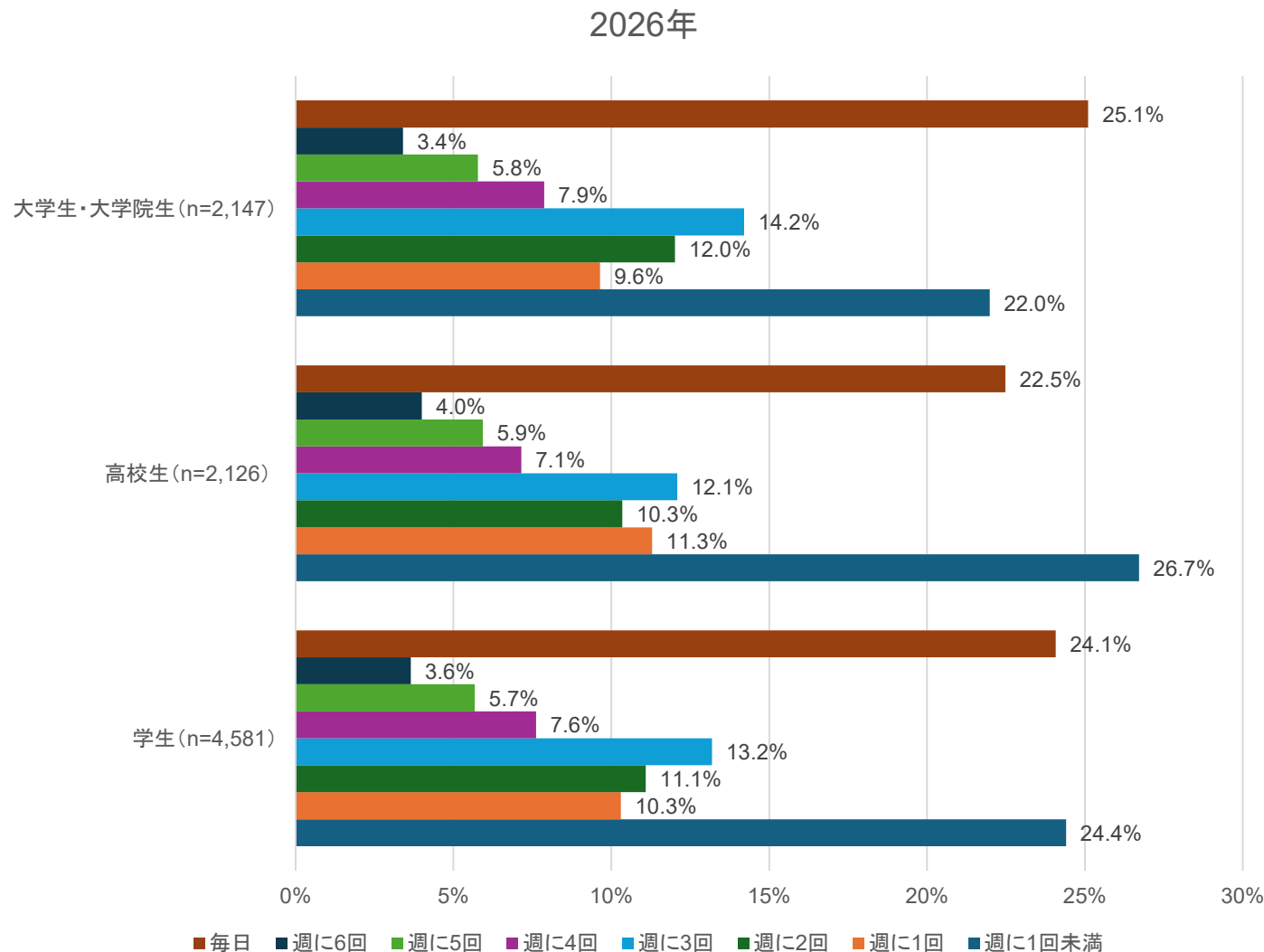
2026年 教員 (n=1,443)



- 教員が利用している生成AIでは、ChatGPT無料版が63.5%と最も高く、Google Gemini無料版も57.0%と高い利用率を示した。
- Microsoft Copilotは30.1%で、学生と比べて教員での利用が目立つ。さらにCanvaが10.5%、NotebookLMが6.0%で続いた。
- 一方、有料版の利用はChatGPTが6.0%、Geminiが5.8%にとどまり、教員でも無料版を中心とした利用が主流となっている。

生成AIの使用頻度（学生）

あなたは生成AIを一週間のうち、どのくらい使用していますか？



- 2026年の学生の生成AI利用頻度を見ると、「毎日」利用する学生は24.1%で、約4人に1人に達した。
- また、「週2回以上」を合計すると65.3%となり、生成AI利用者の約3分の2が週に複数回利用している。
- 学校種別では、大学・大学院生の「毎日」が25.1%、高校生が22.5%であった。週2回以上の利用も大学・大学院生68.4%、高校生61.9%となっており、大学・大学院生の方がやや高頻度で利用する傾向がみられた。
- 一方、「週1回未満」は学生全体で24.4%であり、利用頻度には幅がある。

生成AIの使用頻度（学生） 3年間推移

- 生成AIの利用頻度は、この3年間で大きく高まっている。
- 学生全体では「週1回未満」が2024年の64.1%から2026年には24.4%へ大幅に低下する一方、「毎日」は4.0%から24.1%へ上昇した。
- 週2回以上利用する学生も2024年の25.0%から2026年には65.3%へ増加している。
- 高校生、大学・大学院生でも同様の傾向がみられ、2026年の「毎日」利用はそれぞれ22.5%、25.1%となった。

あなたは生成AIを一週間のうち、どのくらい使用していますか？

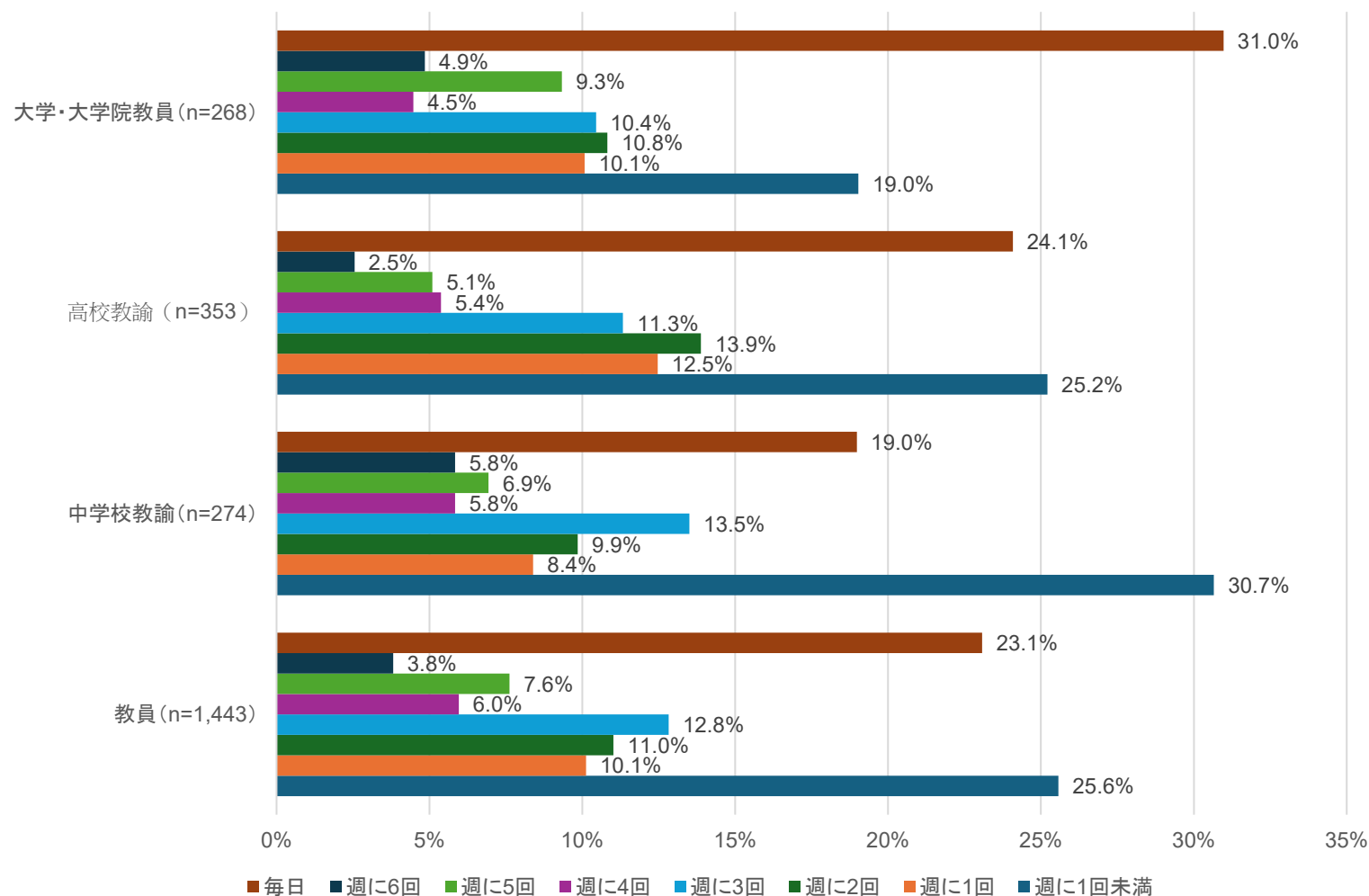
3年間比較

利用頻度	学生			高校生			大学・大学院生		
	2026 (n=4,581)	2025 (n=2,576)	2024 (n=1,308)	2026 (n=2,126)	2025 (n=1,187)	2024 (n=604)	2026 (n=2,147)	2025 (n=1,148)	2024 (n=589)
週に1回未満	24.4%	55.4%	64.1%	26.7%	59.0%	65.9%	22.0%	51.0%	63.0%
週に1回	10.3%	11.8%	11.0%	11.3%	11.2%	9.9%	9.6%	12.5%	11.7%
週に2回	11.1%	11.2%	8.7%	10.3%	9.3%	7.6%	12.0%	13.9%	9.0%
週に3回	13.2%	7.8%	7.0%	12.1%	5.7%	7.3%	14.2%	10.0%	7.3%
週に4回	7.6%	3.7%	2.4%	7.1%	3.4%	1.3%	7.9%	4.0%	3.4%
週に5回	5.7%	3.1%	2.1%	5.9%	3.3%	2.6%	5.8%	2.9%	1.7%
週に6回	3.6%	1.3%	0.8%	4.0%	1.2%	0.5%	3.4%	1.3%	0.8%
毎日	24.1%	5.6%	4.0%	22.5%	7.0%	4.8%	25.1%	4.4%	3.1%

生成AIの使用頻度（教員）

あなたは生成AIを一週間のうち、どのくらい使用していますか？

2026年



(n=1,443)

- 2026年の教員の生成AI利用頻度を見ると、教員全体では「毎日」が23.1%で、週2回以上利用する教員は64.3%に達した。
- 学校種別では、大学・大学院教員の「毎日」利用が31.0%と最も高く、週2回以上の利用も70.9%であった。
- 高校教諭では「毎日」が24.1%、中学校教諭では19.0%となっている。
- 一方、「週1回未満」は中学校教諭で30.7%、高校教諭で25.2%、大学・大学院教員で19.0%であり、大学・大学院教員ほど高頻度で利用する傾向がみられた。

- 教員の生成AI利用頻度は、3年間で明確に高まっている。
- 教員全体では「週1回未満」が2024年の54.2%から2026年には25.6%へ低下する一方、「毎日」は6.0%から23.1%へ上昇した。週2回以上利用する教員も29.2%から64.3%へ増加している。
- 学校種別でも同様の傾向がみられ、2026年の週2回以上の利用は中学校教諭60.9%、高校教諭62.3%、大学・大学院教員70.9%となった。
- 特に大学・大学院教員では「毎日」の利用が10.5%から31.0%へ上昇している。

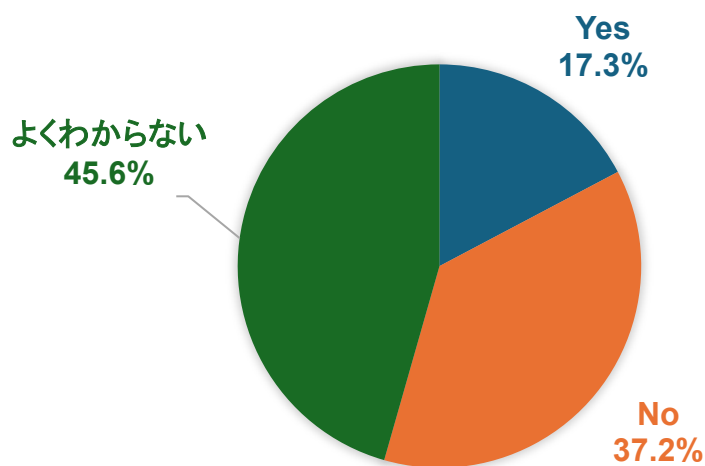
あなたは生成AIを一週間のうち、どのくらい使用していますか？ 3年間比較

利用頻度	教員			中学校教諭			高校教諭			大学・大学院教員		
	2026 (n=1,443)	2025 (n=809)	2024 (n=504)	2026 (n=274)	2025 (n=141)	2024 (n=93)	2026 (n=353)	2025 (n=192)	2024 (n=119)	2026 (n=268)	2025 (n=192)	2024 (n=133)
週に1回未満	25.6%	44.3%	54.2%	30.7%	49.7%	58.1%	25.2%	45.3%	57.1%	19.0%	39.6%	51.9%
週に1回	10.1%	17.3%	16.7%	8.4%	14.9%	19.4%	12.5%	20.8%	12.6%	10.1%	15.1%	17.3%
週に2回	11.0%	12.2%	9.9%	9.9%	11.4%	10.8%	13.9%	11.5%	11.8%	10.8%	9.9%	6.0%
週に3回	12.8%	9.3%	8.1%	13.5%	8.5%	5.4%	11.3%	7.8%	5.9%	10.4%	10.4%	9.8%
週に4回	6.0%	4.1%	2.4%	5.8%	3.6%	0.0%	5.4%	3.7%	4.2%	4.5%	4.7%	1.5%
週に5回	7.6%	3.8%	1.6%	6.9%	4.3%	2.2%	5.1%	1.6%	2.5%	9.3%	5.7%	1.5%
週に6回	3.8%	1.2%	1.2%	5.8%	0.7%	2.2%	2.5%	1.6%	0.8%	4.9%	2.6%	1.5%
毎日	23.1%	7.8%	6.0%	19.0%	7.1%	2.2%	24.1%	7.8%	5.0%	31.0%	12.0%	10.5%

- 2026年にオプトアウト設定を利用したことがある学生は17.3%にとどまり、「利用したことがない」が37.2%、「よくわからない」が45.6%であった。
- 3年間でみても、利用経験は2024年18.0%、2025年15.0%、2026年17.3%と大きな変化はみられない。
- 「よくわからない」も各年約46%を占めており、オプトアウト設定の認知や利用は依然として十分に広がっていない状況がうかがえる。

生成AIに入力した内容が利用されないようにするためのオプトアウト設定を利用したことがありますか？

学生 2026年(N=4,581)

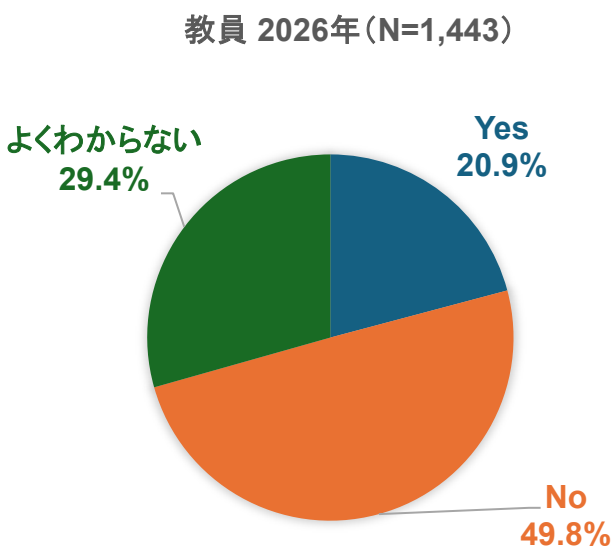


3年間比較

回答	2024年 (n=1,308)	2025年 (n=2,576)	2026年 (n=4,581)
Yes	18.0%	15.0%	17.3%
No	35.2%	38.8%	37.2%
よくわからない	46.8%	46.2%	45.6%

- 2026年にオプトアウト設定を利用したことがある教員は20.9%で、2024年の18.8%から2.1ポイント上昇した。
- 一方、「利用したことがない」は56.0%から49.8%へ低下したものの、依然として約半数を占めている。
- また、「よくわからない」は29.4%で、2024年の25.2%、2025年の24.4%を上回った。
- 教員においても、オプトアウト設定の利用は2割程度にとどまり、設定への理解や認知には課題が残っていることがうかがえる。

生成AIに入力した内容が利用されないようにするためのオプトアウト設定を利用したことがありますか？

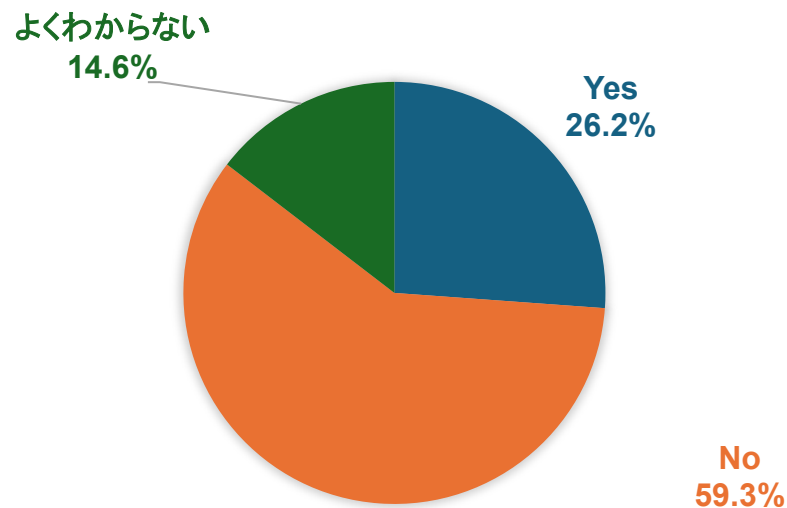


3年間比較			
回答	2024年 (n=504)	2025年 (n=809)	2026年 (n=1,443)
Yes	18.8%	20.1%	20.9%
No	56.0%	55.5%	49.8%
よくわからない	25.2%	24.4%	29.4%

- 生成AIに個人情報を入力したことがある学生は、2026年に26.2%となり、2025年の14.6%から11.6ポイント上昇した。
- 2024年の17.2%と比べても9.0ポイント高く、2026年には約4人に1人が入力経験を持つ。
- 一方、「No」は59.3%で依然として過半数を占めるが、2025年の68.8%から低下した。
- 「よくわからない」も2024年の21.7%から2026年には14.6%へ低下しており、個人情報の入力経験が増えている点が注目される。

あなたは、生成AIに個人情報（氏名、生年月日、住所、所属大学・学校名等）を入力したことがありますか？

学生 2026年(N=4,581)

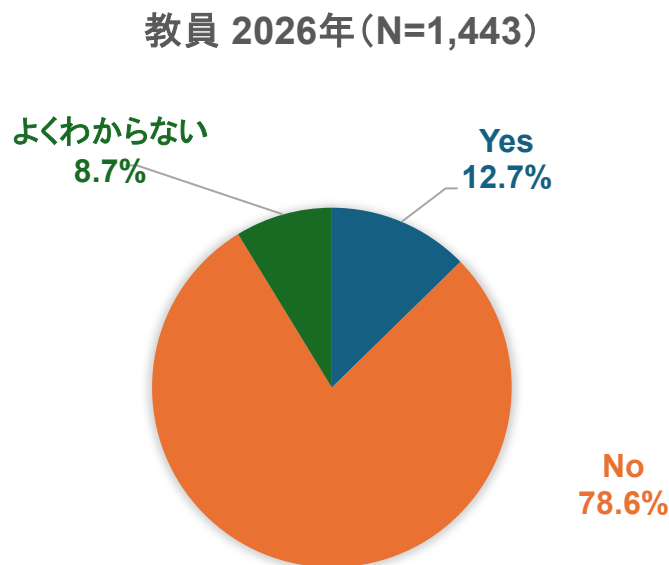


3年間比較

回答	2024年 (n=1,308)	2025年 (n=2,576)	2026年 (n=4,581)
Yes	17.2%	14.6%	26.2%
No	61.1%	68.8%	59.3%
よくわからない	21.7%	16.7%	14.6%

- ・ 生成AIに個人情報を入力したことがある教員は、2026年に12.7%で、2024年の14.3%、2025年の13.7%からやや低下した。
- ・ 一方、「入力したことがない」は78.6%と約8割を占め、3年間を通じて高い水準で推移している。
- ・ 「よくわからない」は8.7%であった。学生と比べると、教員は個人情報の入力経験がない割合が高い。

あなたは、生成AIに個人情報（氏名、生年月日、住所、所属大学・学校名等）を入力したことがありますか？



3年間比較

回答	2024年 (n=504)	2025年 (n=809)	2026年 (n=1,443)
Yes	14.3%	13.7%	12.7%
No	77.2%	76.0%	78.6%
よくわからない	8.5%	10.3%	8.7%

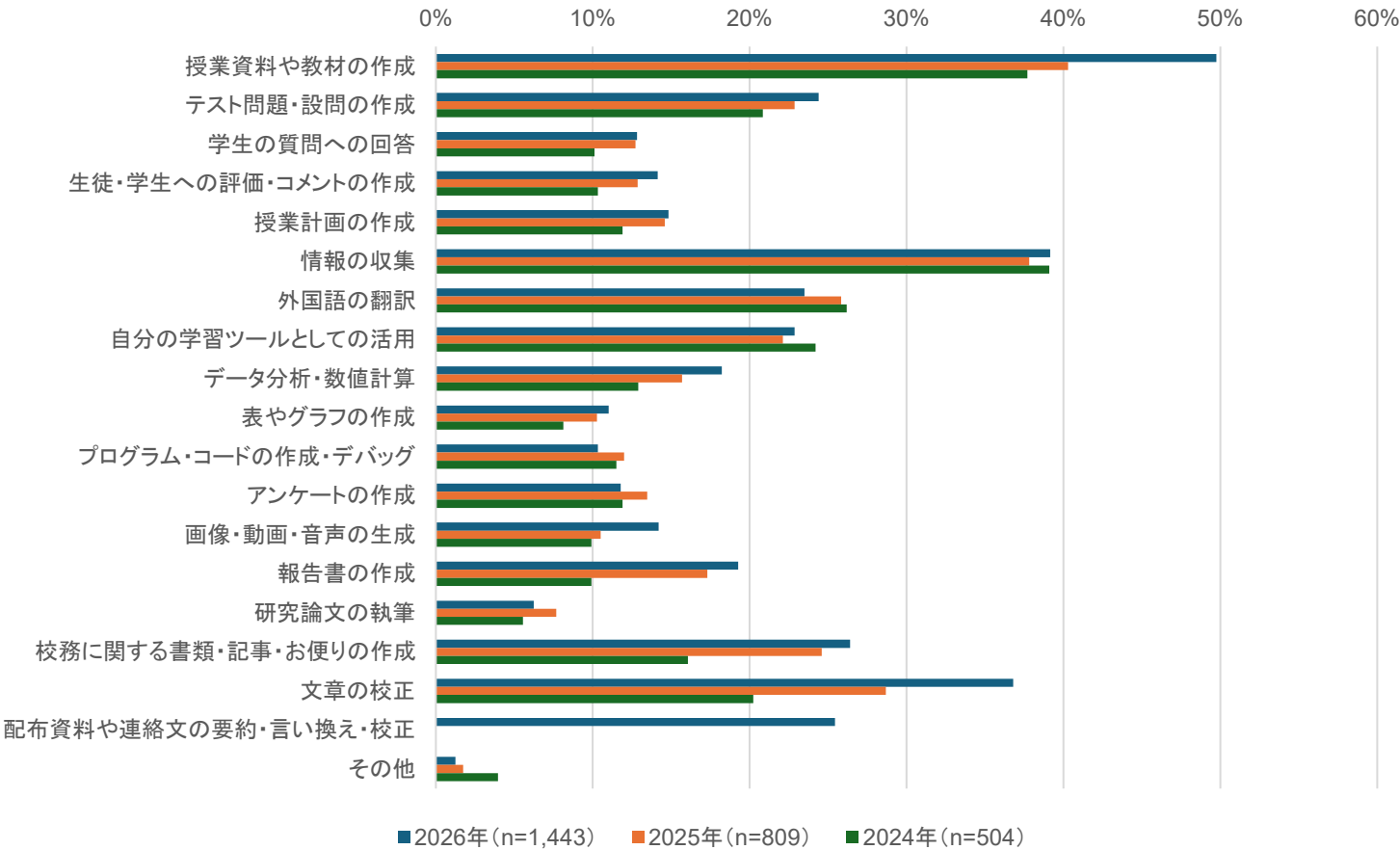
教員の生成AIの使用用途

- ・ 教員の生成AI利用は3年間で広がっている。
- ・ 「授業資料や教材の作成」は2024年37.7%、2025年40.3%、2026年49.8%と上昇した。
- ・ 「文章の校正」も20.2%→28.7%→36.8%と増加し、授業準備だけでなく文章作成や校務への活用も広がっている。

教員の生成AIの使用用途（2026年）

使用用途	中学校教諭 (n=274)	高校教諭 (n=353)	大学・大学院教員 (n=268)
授業資料や教材の作成	52.6%	49.9%	46.6%
テスト問題・設問の作成	28.5%	30.3%	21.3%
学生の質問への回答	13.5%	15.0%	12.3%
生徒・学生への評価・コメントの作成	15.0%	16.4%	10.1%
授業計画の作成	13.1%	12.7%	16.0%
情報の収集	36.9%	34.3%	49.6%
外国語の翻訳	19.3%	22.4%	42.9%
自分の学習ツールとしての活用	23.7%	22.4%	26.9%
データ分析・数値計算	16.1%	18.4%	22.4%
表やグラフの作成	12.8%	11.3%	13.4%
プログラム・コードの作成・デバッグ	9.1%	9.3%	20.1%
アンケートの作成	12.0%	11.3%	10.8%
画像・動画・音声の生成	16.4%	16.1%	12.3%
報告書の作成	15.7%	17.8%	25.7%
研究論文の執筆	4.0%	3.1%	17.5%
校務に関する書類・記事・お便りの作成	31.4%	23.5%	22.4%
文章の校正	34.7%	36.5%	44.8%
配布資料や連絡文の要約・言い換え・校正	23.4%	24.4%	25.7%
その他	1.1%	1.4%	1.5%

教員の生成AIの使用用途の3年間比較

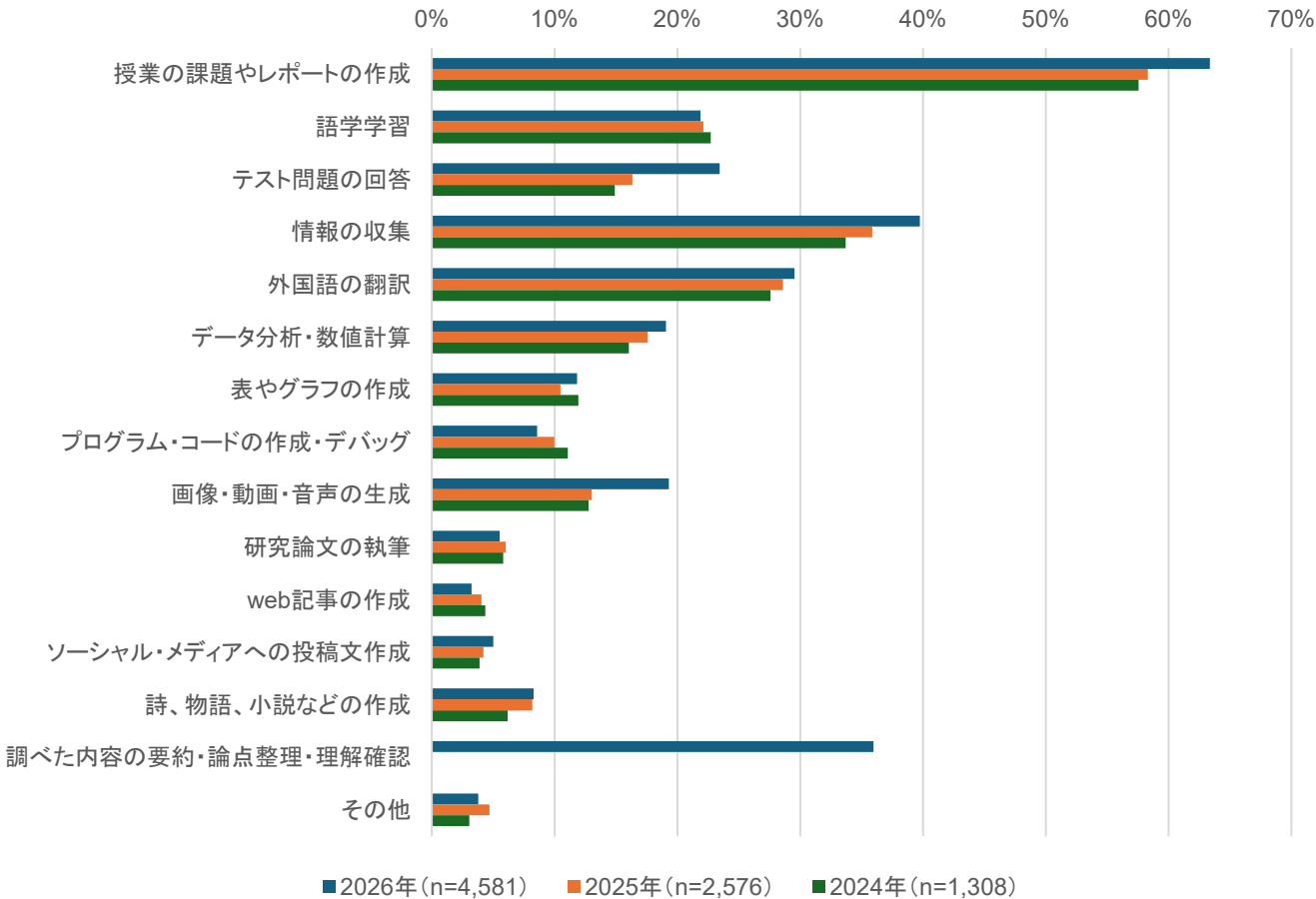


- 学生の生成AI利用は3年間で幅広い用途に広がっている。
- 「授業の課題やレポートの作成」は2024年57.6%、2025年58.3%、2026年63.4%と上昇した。
- 「情報の収集」も33.7%→35.9%→39.8%、「テスト問題の回答」は14.9%→16.3%→23.4%となり、学習場面での活用が拡大している。

学生の生成AIの使用用途（2026年）

使用用途	高校生 (n=2,126)	大学・大学院生 (n=2,147)
授業の課題やレポートの作成	63.5%	63.9%
語学学習	23.0%	21.4%
テスト問題の回答	24.6%	23.0%
情報の収集	38.8%	41.3%
外国語の翻訳	32.5%	28.3%
データ分析・数値計算	17.4%	21.3%
表やグラフの作成	11.2%	12.6%
プログラム・コードの作成・デバッグ	6.2%	10.1%
画像・動画・音声の生成	22.0%	15.7%
研究論文の執筆	3.9%	7.3%
web記事の作成	2.7%	3.8%
ソーシャル・メディアへの投稿文作成	4.0%	6.2%
詩、物語、小説などの作成	9.7%	6.9%
調べた内容の要約・論点整理・理解確認	34.4%	37.8%
その他	4.7%	3.0%

学生の生成AIの使用用途の3年間比較



学生と教員の 生成AIの教育・学習利用に対す る意識

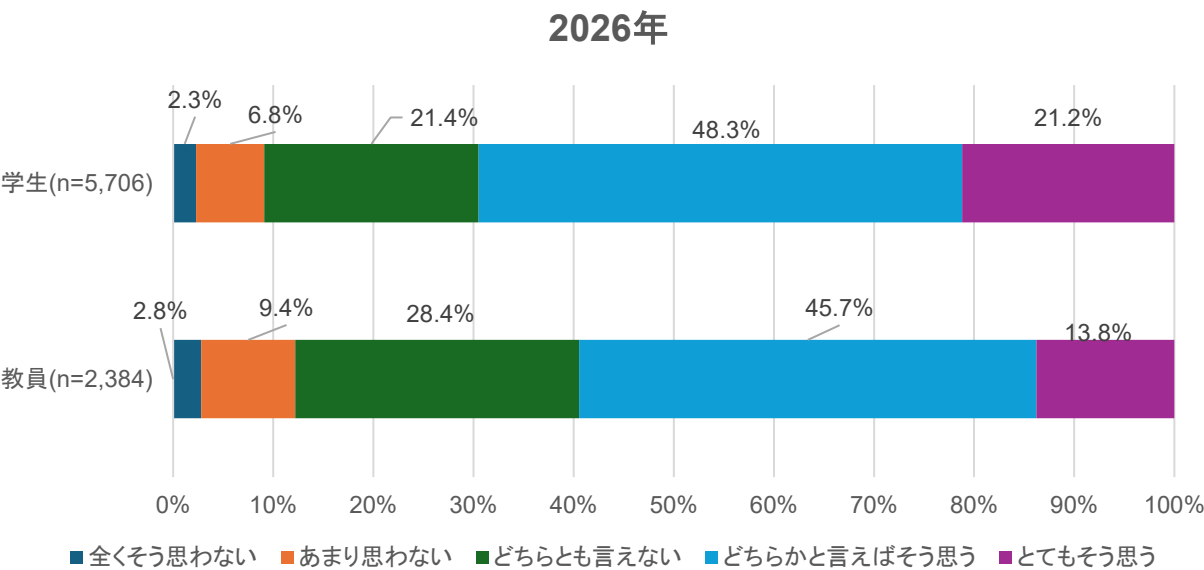
「教育・学習における可能性が広がる」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年53.2%、2025年55.5%、2026年59.5%と3年連続で上昇した。

学生では2024年69.4%、2025年72.3%、2026年69.5%と、3年間を通じて約7割が肯定的に回答しており、教員より高い水準で推移している。

学生と教員の肯定回答の差は、2024年の**16.2ポイント**から2026年には**10.0ポイント**まで縮小しており、教員側でも生成AIの教育・学習上の可能性を前向きに捉える回答が増えている。

2026年は、否定的回答（「全くそう思わない」＋「あまり思わない」）が教員**12.2%**、学生**9.1%**にとどまる一方、「どちらとも言えない」は教員**28.4%**、学生**21.4%**であり、一定数は判断を留保している。

教育・学習における可能性が広がると思う

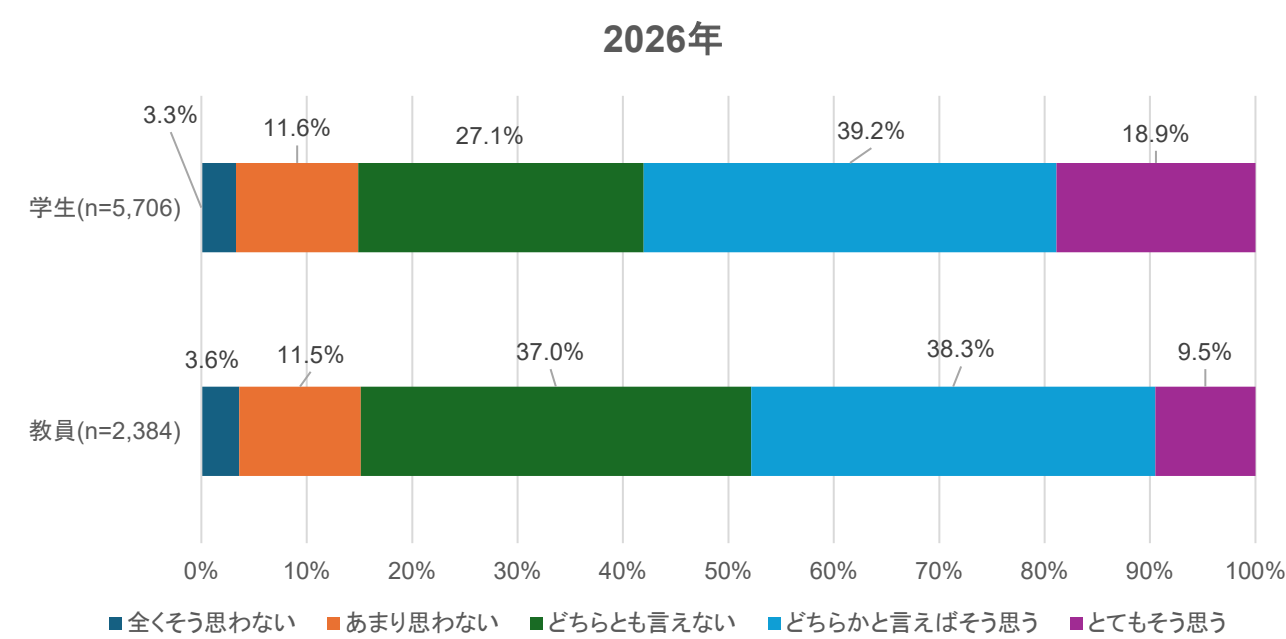


3年間比較

年	区分	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とてもそ う思う
2026年	教員(n=2,384)	2.8%	9.4%	28.4%	45.7%	13.8%
	学生(n=5,706)	2.3%	6.8%	21.4%	48.3%	21.2%
2025年	教員 (n=2,506)	3.3%	10.1%	31.0%	44.4%	11.2%
	学生 (n=4,725)	2.5%	7.7%	17.5%	51.9%	20.4%
2024年	教員 (n=2,616)	4.2%	12.1%	30.5%	39.9%	13.3%
	学生 (n=4,323)	4.9%	8.8%	16.9%	46.1%	23.3%

- ・「教育・学習上の効果が上がる」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年41.1%、2025年44.3%、2026年47.8%と3年連続で上昇した。
- ・学生では2024年58.0%、2025年59.5%、2026年58.1%と、3年間を通じて約6割で推移している。
- ・学生と教員の肯定回答の差は、2024年の16.9ポイントから2026年には10.3ポイントまで縮小しており、教員側で教育・学習上の効果への肯定的評価が高まっている。
- ・2026年の「とてもそう思う」は学生18.9%、教員9.5%で、学生の方が強い肯定を示す割合が高い。一方、「どちらとも言えない」は教員37.0%、学生27.1%で、教員では判断を留保する回答も多い。

教育・学習上の効果が上がると思う



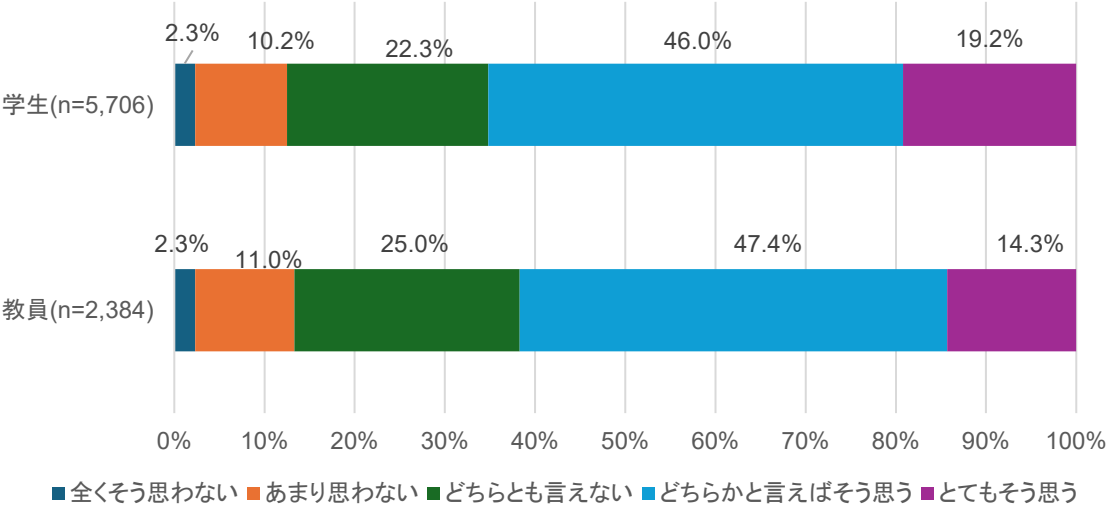
3年間比較

年	区分	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とてもそ う思う
2026年	教員(n=2,384)	3.6%	11.5%	37.0%	38.3%	9.5%
	学生(n=5,706)	3.3%	11.6%	27.1%	39.2%	18.9%
2025年	教員 (n=2,506)	3.5%	14.7%	37.5%	36.8%	7.5%
	学生 (n=4,725)	3.2%	12.9%	24.5%	41.3%	18.1%
2024年	教員 (n=2,616)	5.2%	14.8%	39.0%	32.3%	8.8%
	学生 (n=4,323)	5.5%	12.9%	23.6%	38.1%	19.9%

- ・「生成AIは自分の将来に役立つ」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年47.0%、2025年49.8%、2026年61.7%と上昇し、特に2025年から2026年に大きく高まった。
- ・学生では2024年62.3%、2025年65.7%、2026年65.2%と、3年間を通じて6割を超える高い水準で推移している。
- ・学生と教員の肯定回答の差は、2024年15.3ポイント、2025年15.9ポイントであったが、2026年には3.5ポイントまで縮小した。2026年は教員側で、生成AIが将来に役立つとの認識が大きく高まっている。
- ・教員の「どちらとも言えない」は2024年36.0%から2025年33.1%、2026年25.0%へ低下しており、判断を留保する回答が減少する一方、肯定的回答の割合が増加した。

生成AIは自分の将来に役立つと思う

2026年



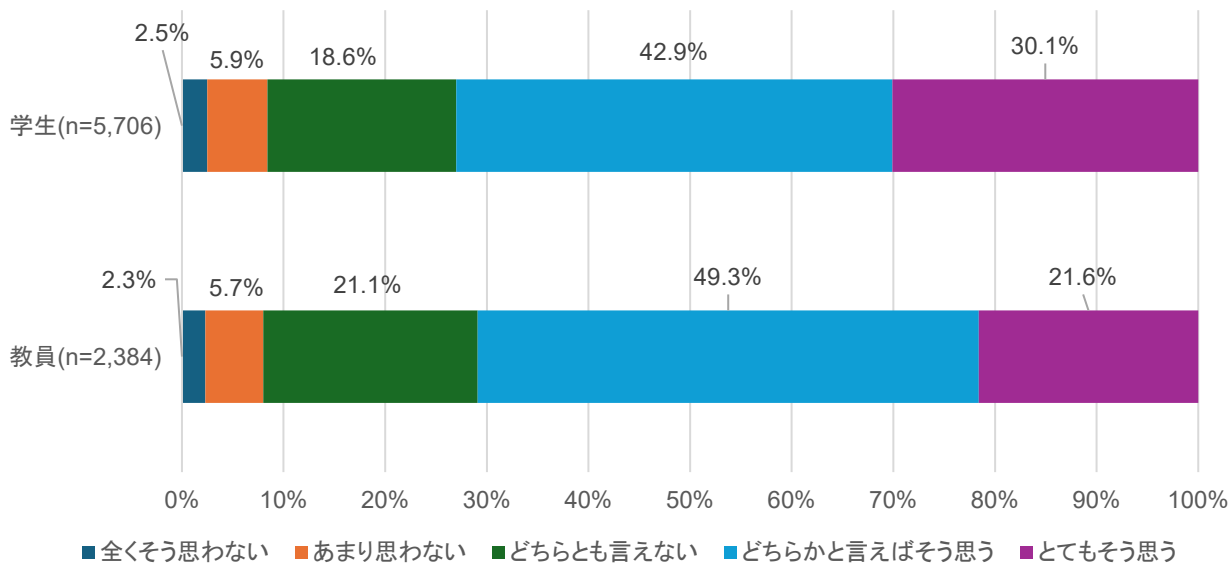
3年間比較

年	区分	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とてもそ う思う
2026年	教員(n=2,384)	2.3%	11.0%	25.0%	47.4%	14.3%
	学生(n=5,706)	2.3%	10.2%	22.3%	46.0%	19.2%
2025年	教員 (n=2,506)	4.4%	12.7%	33.1%	39.3%	10.5%
	学生 (n=4,725)	2.4%	8.4%	23.5%	43.3%	22.3%
2024年	教員 (n=2,616)	4.4%	12.6%	36.0%	35.6%	11.4%
	学生 (n=4,323)	5.2%	9.0%	23.5%	38.6%	23.7%

- ・「生成AIを活用することで、学び方が変化する」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年65.9%、2025年65.5%、2026年70.9%となり、2026年に7割を超えた。
- ・学生では2024年73.4%、2025年75.8%、2026年73.0%と、3年間を通じて7割を超える高い水準で推移している。
- ・2026年の肯定回答は学生73.0%、教員70.9%で、その差は2.1ポイントまで縮小した。生成AIによる学び方の変化について、学生だけでなく教員でも肯定的な認識が広がっている。
- ・「とてもそう思う」は学生では3年間を通じて約3割で推移している一方、教員では2024年18.5%、2025年17.2%、2026年21.6%となり、2026年に上昇した。

生成AIを活用することで、学び方が変化すると思う

2026年



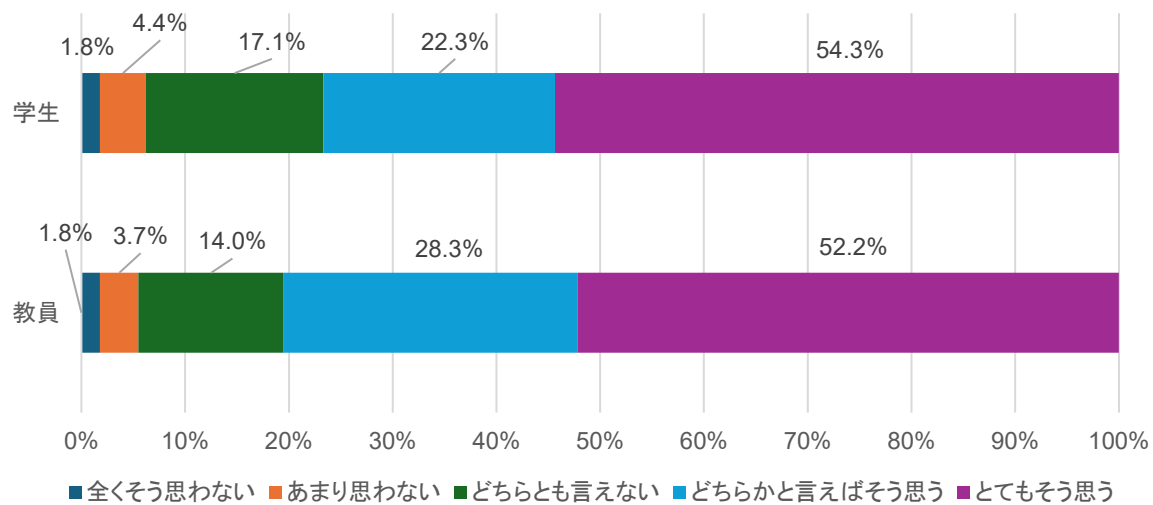
3年間比較

年	区分	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とてもそ う思う
2026年	教員(n=2,384)	2.3%	5.7%	21.1%	49.3%	21.6%
	学生(n=5,706)	2.5%	5.9%	18.6%	42.9%	30.1%
2025年	教員 (n=2,506)	3.0%	7.7%	23.8%	48.4%	17.2%
	学生 (n=4,725)	2.3%	6.2%	15.8%	46.6%	29.2%
2024年	教員 (n=2,616)	3.4%	7.6%	23.1%	47.4%	18.5%
	学生 (n=4,323)	4.6%	5.9%	16.1%	43.2%	30.2%

- ・「生成AIの利用が不正行為に該当しないよう注意しなければならない」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年76.9%、2025年77.7%、2026年80.5%と上昇した。
- ・学生では2024年79.1%、2025年81.7%、2026年76.6%となり、3年間を通じて8割前後が不正行為への注意が必要だと認識している。
- ・2026年は教員80.5%、学生76.6%となり、教員の肯定回答が学生を3.9ポイント上回った。2024年、2025年は学生の方が高かったため、2026年には両者の関係が逆転している。
- ・2026年の「とてもそう思う」は学生54.3%、教員52.2%と、いずれも半数を超えている。生成AIの利用拡大が進む中でも、不正行為に該当しないよう注意する必要性は、学生・教員の双方で強く認識されている。

生成AIの利用が、不正行為に該当しないように注意しなければならないと思う

2026年



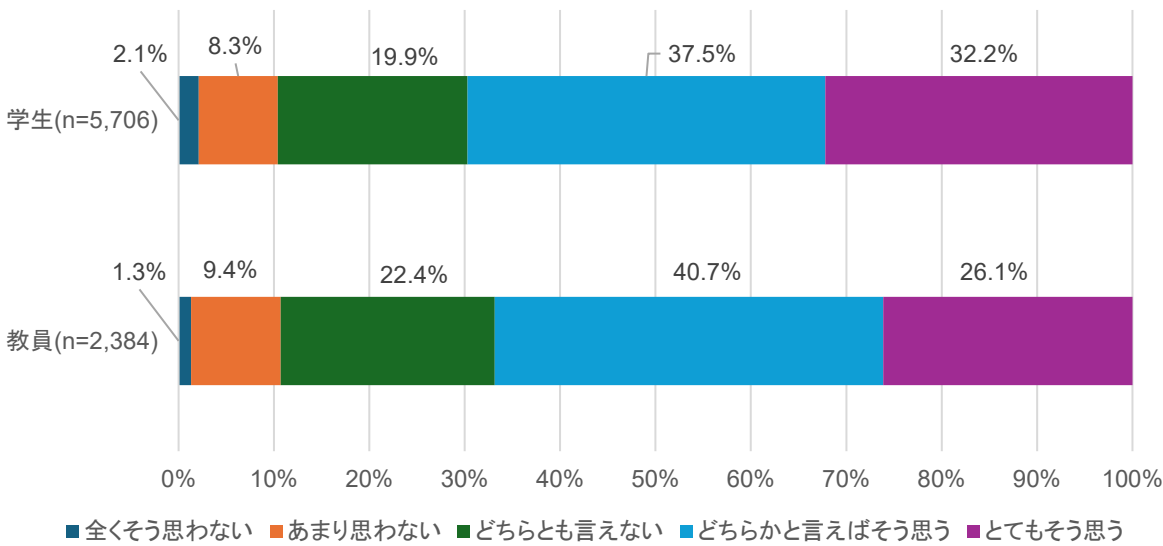
3年間比較

年	区分	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とてもそ う思う
2026年	教員 (n=2,384)	1.8%	3.7%	14.0%	28.3%	52.2%
	学生 (n=5,706)	1.8%	4.4%	17.1%	22.3%	54.3%
2025年	教員 (n=2,506)	1.8%	4.6%	16.0%	30.7%	47.1%
	学生 (n=4,725)	1.6%	3.4%	13.3%	26.8%	55.0%
2024年	教員 (n=2,616)	2.5%	3.8%	16.7%	28.7%	48.2%
	学生 (n=4,323)	3.6%	3.8%	13.5%	25.2%	53.9%

- ・「教育・学習が生成AIに依存してしまうのではないかな不安だ」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年61.7%、2025年63.8%、2026年66.8%と3年連続で上昇した。
- ・学生でも2024年65.8%、2025年69.0%、2026年69.7%と上昇しており、3年間を通じて約3分の2以上が生成AIへの依存に不安を感じている。
- ・2026年の肯定回答は学生69.7%、教員66.8%で、学生の方が2.9ポイント高い。ただし、学生・教員ともに不安を感じる割合は高く、生成AIの利用拡大と並行して依存への懸念も強まっている。
- ・「とてもそう思う」は学生で2024年30.5%、2025年29.5%、2026年32.2%と約3割で推移した一方、教員では22.2%→22.9%→26.1%と上昇しており、教員側でも強い不安を示す割合が増えている。

教育・学習が、生成AIに依存してしまうのではないかな不安だ

2026年

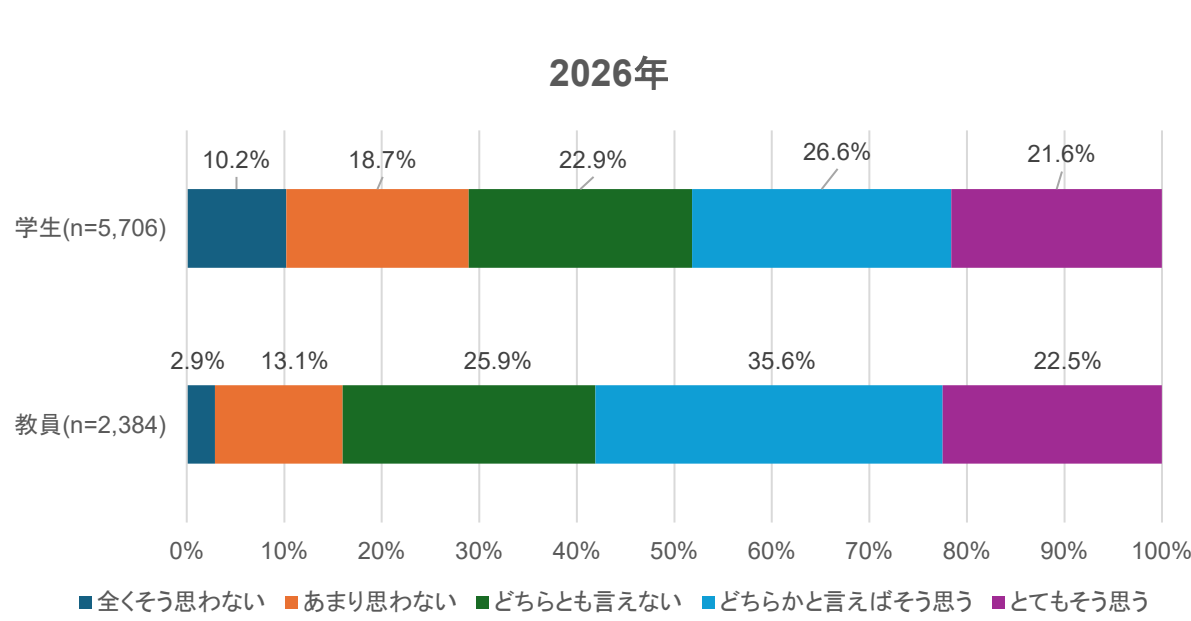


3年間比較

年	区分	全くそう 思わない	あまり思わ ない	どちらとも 言えない	どちらかと 言えばそう 思う	とてもそう 思う
2026年	教員 (n=2,384)	1.3%	9.4%	22.4%	40.7%	26.1%
	学生 (n=5,706)	2.1%	8.3%	19.9%	37.5%	32.2%
2025年	教員 (n=2,506)	1.9%	9.9%	24.4%	40.9%	22.9%
	学生 (n=4,725)	3.2%	10.1%	17.7%	39.4%	29.5%
2024年	教員 (n=2,616)	2.6%	11.0%	24.7%	39.5%	22.2%
	学生 (n=4,323)	4.8%	11.1%	18.3%	35.3%	30.5%

- ・「AIを使ってカンニングしてしまいそうで不安だ」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年55.1%、2025年58.7%、2026年58.1%となり、3年間を通じて半数を超えた。
- ・学生では2024年48.3%、2025年51.3%、2026年48.2%で推移しており、約半数が生成AIを使ったカンニングへの不安を感じている。
- ・2026年の肯定回答は教員58.1%、学生48.2%で、教員が学生を9.9ポイント上回った。教員の方が、生成AIの利用がカンニングにつながる事への懸念を強く持つ傾向がみられる。
- ・「とてもそう思う」は教員で2024年20.5%、2025年21.5%、2026年22.5%と緩やかに上昇した。一方、学生では22.5%、23.1%、21.6%と大きな変化はみられず、強い不安を示す割合は2割程度で推移している。

AIを使ってカンニングしてしまいそうで不安だ

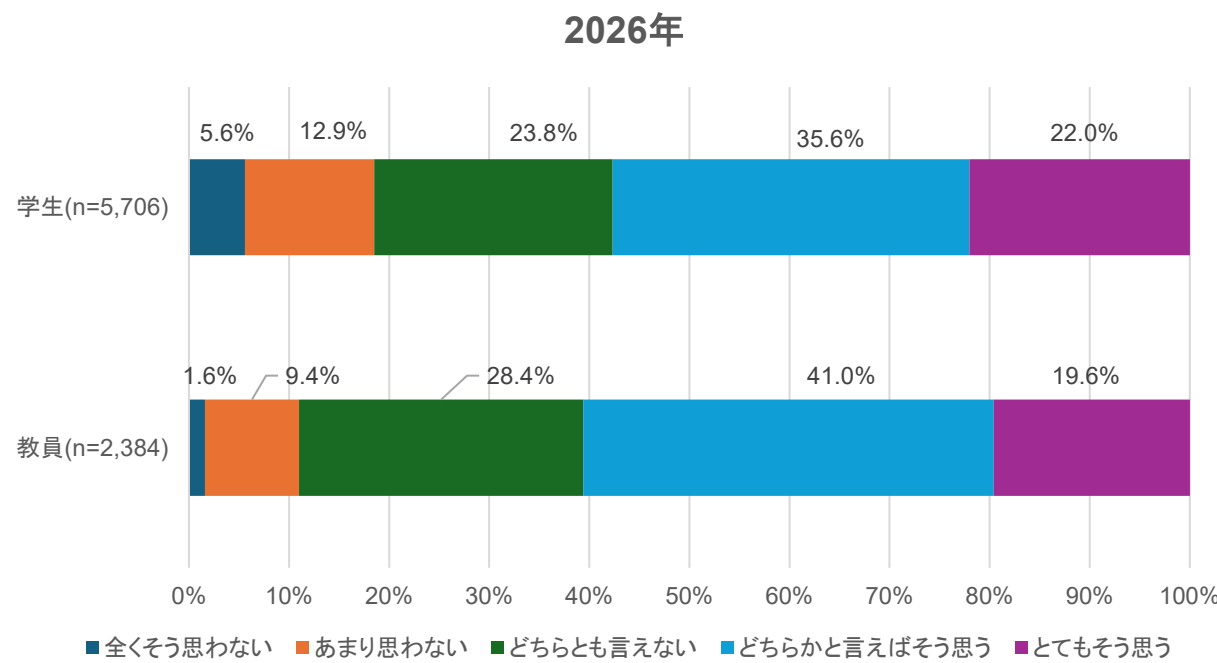


3年間比較

年	区分	全くそう思わない	あまり思わない	どちらとも言えない	どちらかと言えばそう思う	とてもそう思う
2026年	教員 (n=2,384)	2.9%	13.1%	25.9%	35.6%	22.5%
	学生 (n=5,706)	10.2%	18.7%	22.9%	26.6%	21.6%
2025年	教員 (n=2,506)	2.6%	11.4%	27.3%	37.2%	21.5%
	学生 (n=4,725)	10.1%	19.0%	19.6%	28.2%	23.1%
2024年	教員 (n=2,616)	3.2%	12.5%	29.1%	34.6%	20.5%
	学生 (n=4,323)	12.7%	19.6%	19.4%	25.8%	22.5%

- ・「学習情報のプライバシーや学校の情報セキュリティに関する不安を感じる」割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年58.1%、2025年59.3%、2026年60.6%と緩やかに上昇した。
- ・学生では2024年58.1%、2025年57.0%、2026年57.6%となり、3年間を通じて6割弱の水準で大きな変化はみられない。
- ・2024年には学生と教員の肯定回答はいずれも58.1%で同水準だったが、2026年には教員60.6%、学生57.6%となり、教員が3.0ポイント上回った。
- ・2026年の否定的回答（「全くそう思わない」＋「あまり思わない」）は教員11.0%、学生18.5%であり、教員の方がプライバシーや情報セキュリティへの不安を抱く割合が高い。

学習情報のプライバシーや学校の情報セキュリティに関する不安を感じる

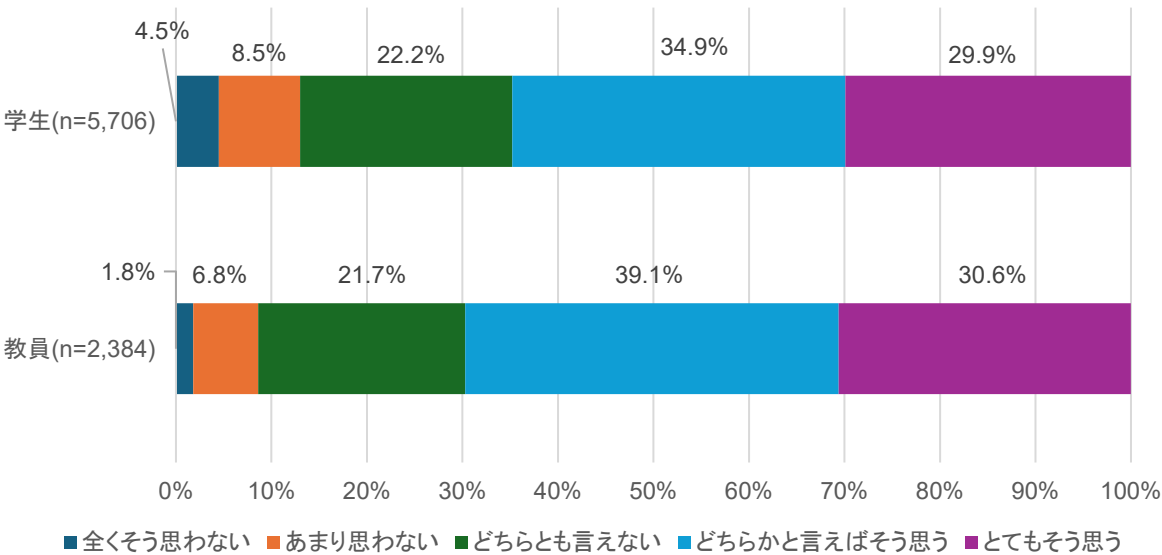


3年間比較						
年	区分	全くそう思わない	あまり思わない	どちらとも言えない	どちらかと言えばそう思う	とてもそう思う
2026年	教員(n=2,384)	1.6%	9.4%	28.4%	41.0%	19.6%
	学生(n=5,706)	5.6%	12.9%	23.8%	35.6%	22.0%
2025年	教員(n=2,506)	2.2%	9.4%	29.1%	41.0%	18.3%
	学生(n=4,725)	5.8%	14.9%	22.4%	35.0%	22.0%
2024年	教員(n=2,616)	2.9%	9.3%	29.7%	40.4%	17.7%
	学生(n=4,323)	6.7%	14.2%	21.1%	33.4%	24.7%

- ・「AIを使って作成されたレポートや文書が、不正行為に当たってしまいそうで不安だ」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年65.6%、2025年67.4%、2026年69.7%となり、3年間で上昇した。
- ・学生では2024年64.2%、2025年66.4%、2026年64.8%と、3年間を通じて約65%で推移しており、大きな変化はみられない。
- ・2026年の肯定回答は教員69.7%、学生64.8%で、教員が学生を4.9ポイント上回った。特に教員では「とてもそう思う」が2025年28.0%から2026年30.6%へ上昇している。
- ・2026年は学生・教員ともに6割を超える回答者が、生成AIを用いて作成した課題やレポートが不正行為に該当する可能性に不安を感じており、生成AI利用の拡大とともに、適切な利用方法や判断基準への関心が続いていることがうかがえる。

AIを使って作成されたレポートや文書が、不正行為に当たってしまいそうで不安だ

2026年

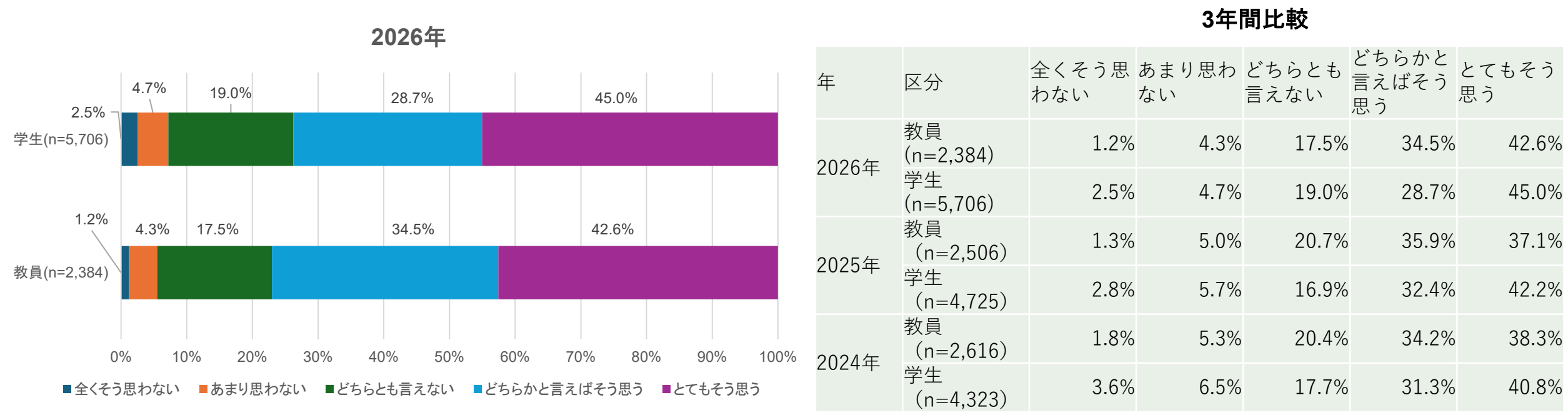


3年間比較

年	区分	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とても そう 思う
2026年	教員 (n=2,384)	1.8%	6.8%	21.7%	39.1%	30.6%
	学生 (n=5,706)	4.5%	8.5%	22.2%	34.9%	29.9%
2025年	教員 (n=2,506)	1.7%	7.3%	23.6%	39.5%	28.0%
	学生 (n=4,725)	5.0%	8.8%	19.8%	36.2%	30.2%
2024年	教員 (n=2,616)	2.2%	7.2%	25.0%	37.9%	27.7%
	学生 (n=4,323)	5.2%	10.6%	20.0%	33.5%	30.7%

- ・「生成AIから出力された結果は、正しいか否かの確認をしなければならない」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年72.5%、2025年73.0%、2026年77.1%と上昇した。
- ・学生でも2024年72.1%、2025年74.6%、2026年73.7%と、3年間を通じて7割を超える高い水準で推移している。
- ・2026年は教員77.1%、学生73.7%となり、教員が学生を3.4ポイント上回った。教員では2024年から2026年にかけて4.6ポイント上昇しており、生成AIの出力内容を確認する必要性への認識が高まっている。
- ・2026年の「とてもそう思う」は学生45.0%、教員42.6%と、いずれも4割を超えている。生成AIの利用が広がる中でも、出力内容をそのまま受け取らず、正しさを確認する必要があるという認識は学生・教員双方で強い。

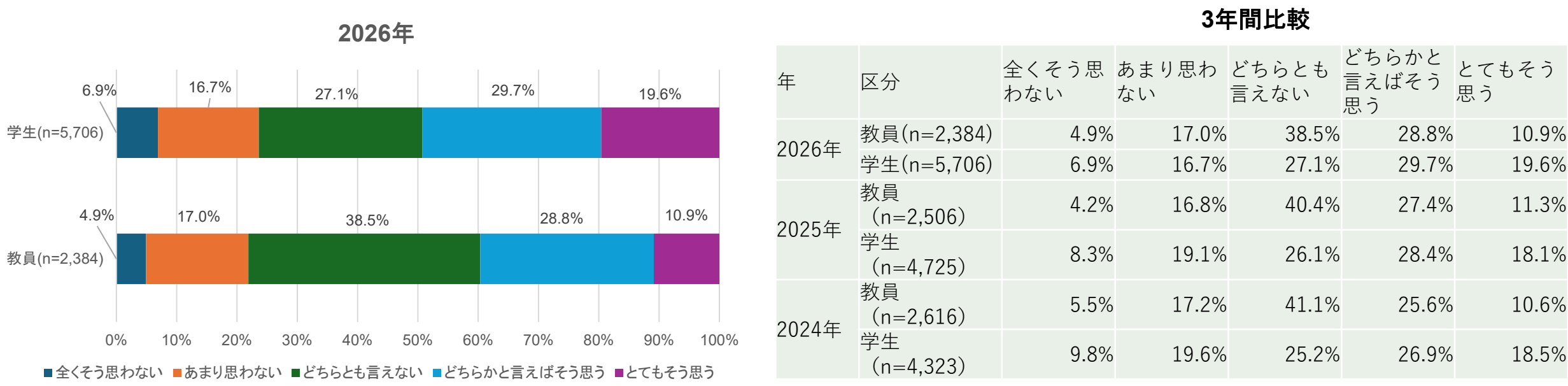
生成AIから出力された結果は、正しいか否かの確認をしなければならないと思う



- ・「自分が入力した内容がAIの出力精度を上げるために使われているかと思うと不安だ」と考える割合（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、教員で2024年36.2%、2025年38.7%、2026年39.7%と緩やかに上昇した。
- ・学生では2024年45.4%、2025年46.5%、2026年49.3%と上昇しており、3年間を通じて教員より高い水準で推移している。
- ・学生と教員の肯定回答の差は、2024年9.2ポイント、2026年9.6ポイントで大きく変わらない。2026年には学生の約半数が入力データの利用に不安を感じている。
- ・教員では「どちらとも言えない」が2024年41.1%、2025年40.4%、2026年38.5%と約4割を占めており、入力したデータがどのように利用されるかについて判断を留保する回答も多い。

注：2024年の学生の値は、保存データの再集計により公表値を訂正した。

自分が入力した内容がAIの出力精度を上げるために使われているかと思うと不安だ



教員の生成AIによる 教育上の課題

教員の勤務する学校・大学で生じている生成AIに関する問題 41

- ・教員全体では、「不正な提出レポート」が2024年26.3%→2025年32.9%→2026年37.1%と上昇した。「生徒・学生の安易な使用」も21.8%→27.8%→35.5%、「生成AIへの依存」も18.1%→22.9%→30.0%と増加している。
- ・特に大学・大学院では、「不正な提出レポート」が44.3%→52.8%→64.4%と大きく上昇した。一方、教員の生成AIへの抵抗感は全体で28.2%→27.9%→21.6%と低下している。

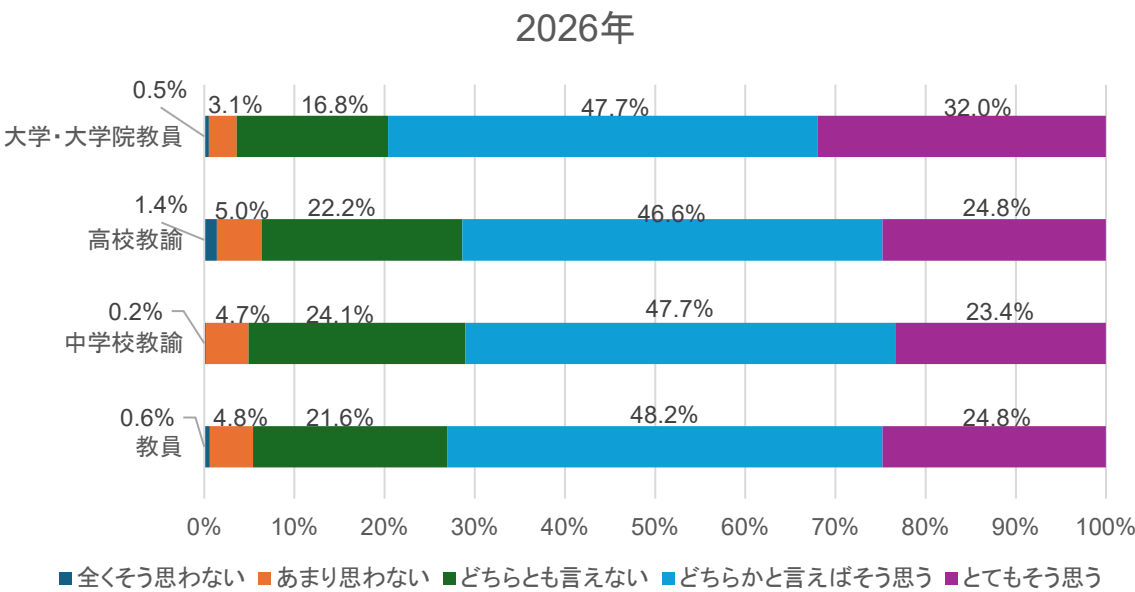
注：2024年の高校教諭の「ガイドラインがない」「抵抗感」「その他」は、保存データの再集計値に訂正した。

あなたの勤務する教育現場において、生成AIに関連してどのような問題が生じていますか？ 3年間比較

対象区分	教員			中学校教諭			高校教諭			大学・大学院教員		
項目	2024年 (n=2,616)	2025年 (n=2,506)	2026年 (n=2,384)	2024年 (n=533)	2025年 (n=481)	2026年 (n=449)	2024年 (n=730)	2025年 (n=673)	2026年 (n=640)	2024年 (n=361)	2025年 (n=396)	2026年 (n=388)
生成AIの使用が疑われる不正な提出レポート	26.3%	32.9%	37.1%	22.3%	32.4%	37.2%	27.5%	36.3%	38.3%	44.3%	52.8%	64.4%
生成AIに対する教員の知識不足	40.9%	43.9%	42.4%	42.6%	42.8%	45.9%	43.8%	46.5%	44.2%	42.4%	40.2%	35.8%
生成AIのどのような使用が、不正行為となるかの判断	25.3%	29.0%	32.0%	22.7%	27.2%	33.9%	26.7%	26.9%	31.3%	36.8%	46.7%	43.3%
生成AIを効果的に教育に組み込む方法	23.5%	28.9%	31.5%	23.6%	28.1%	32.5%	22.6%	26.6%	28.1%	29.9%	35.9%	36.9%
生徒・学生が生成AIを安易に使ってしまっていること	21.8%	27.8%	35.5%	19.9%	29.3%	37.4%	22.6%	25.3%	36.1%	33.2%	44.7%	49.2%
生徒・学生が生成AIに頼っていること	18.1%	22.9%	30.0%	18.6%	22.5%	33.4%	18.2%	22.1%	27.5%	24.1%	34.8%	44.3%
自校における生成AI利用ガイドラインがない	30.7%	30.0%	29.9%	35.1%	29.9%	34.3%	31.2%	29.3%	30.8%	22.4%	21.5%	19.3%
教員の生成AIに対する抵抗感	28.2%	27.9%	21.6%	32.3%	29.1%	22.3%	28.6%	28.5%	22.5%	19.1%	19.4%	15.5%
その他	6.3%	4.6%	2.1%	4.7%	4.6%	2.0%	5.8%	4.9%	2.3%	1.9%	2.8%	1.5%

- ・「生成AIが使われることで生ずる教育的課題に対処しなければならない」と考える教員（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、2024年71.5%、2025年72.3%、2026年73.0%と、3年間を通じて7割を超えている。
- ・2026年を学校種別にみると、肯定回答は中学校教諭71.1%、高校教諭71.4%、大学・大学院教員79.7%で、大学・大学院教員が最も高かった。
- ・特に大学・大学院教員では「とてもそう思う」が32.0%と、中学校教諭23.4%、高校教諭24.8%を上回っており、教育的課題への対応の必要性を強く認識している割合が高い。

生成AIが使われることで生ずる教育的課題に対処しなければならないと思う

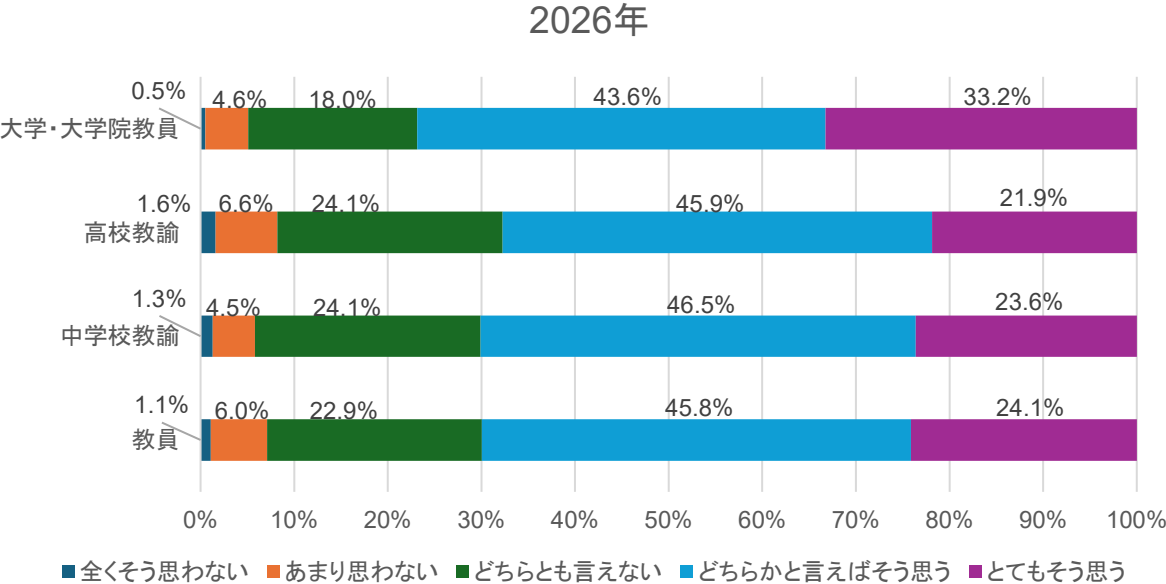


3年間比較

年	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とてもそ う思う
2026年 (n=2,384)	0.6%	4.8%	21.6%	48.2%	24.8%
2025年 (n=2,506)	1.3%	4.4%	22.1%	49.4%	22.9%
2024年 (n=2,616)	1.8%	4.8%	21.9%	45.7%	25.8%

- ・「生成AIを前提とした新しい教育の実践方法を検討する必要がある」と考える教員（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、2024年67.4%、2025年67.6%、2026年69.9%と、3年間を通じて約7割で推移している。
- ・2026年を学校種別にみると、肯定回答は中学校教諭70.1%、高校教諭67.8%、大学・大学院教員76.8%で、大学・大学院教員が最も高かった。
- ・特に大学・大学院教員では「とてもそう思う」が33.2%と、中学校教諭23.6%、高校教諭21.9%を上回っており、生成AIを前提とした教育実践の見直しを強く意識する割合が高い。

生成AIを前提とした新しい教育の実践の方法を検討しなければならないと思う



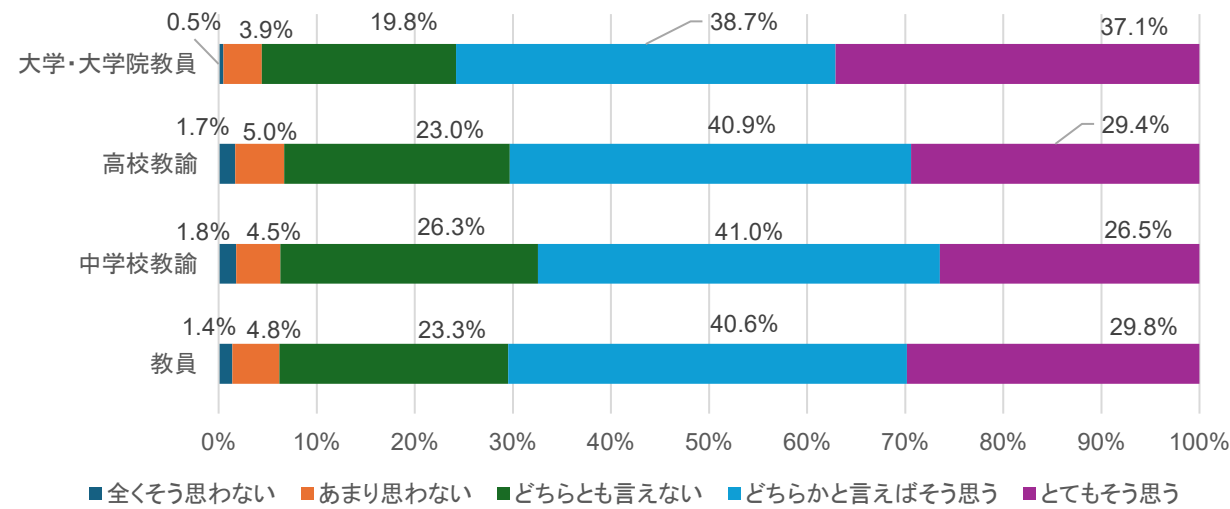
3年間比較

年	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とてもそ う思う
2026年 (n=2,384)	1.1%	6.0%	22.9%	45.8%	24.1%
2025年 (n=2,506)	1.7%	5.8%	25.0%	46.5%	21.1%
2024年 (n=2,616)	1.9%	6.3%	24.4%	44.3%	23.1%

- ・「自校において生成AIの利用ガイドラインを策定することが必要だ」と考える教員（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、2024年69.5%、2025年70.8%、2026年70.4%で、3年間を通じて約7割の高い水準で推移している。
- ・2026年を学校種別にみると、肯定回答は中学校教諭67.5%、高校教諭70.3%、大学・大学院教員75.8%となり、大学・大学院教員で最も高かった。
- ・2026年の教員全体では「とてもそう思う」が29.8%、「どちらかと言えばそう思う」が40.6%であり、生成AIの教育利用が広がる中、学校・大学における利用ルールの整備を必要とする認識が広く共有されている。

自校において生成AIの利用ガイドラインを策定することが必要だと思う

2026年

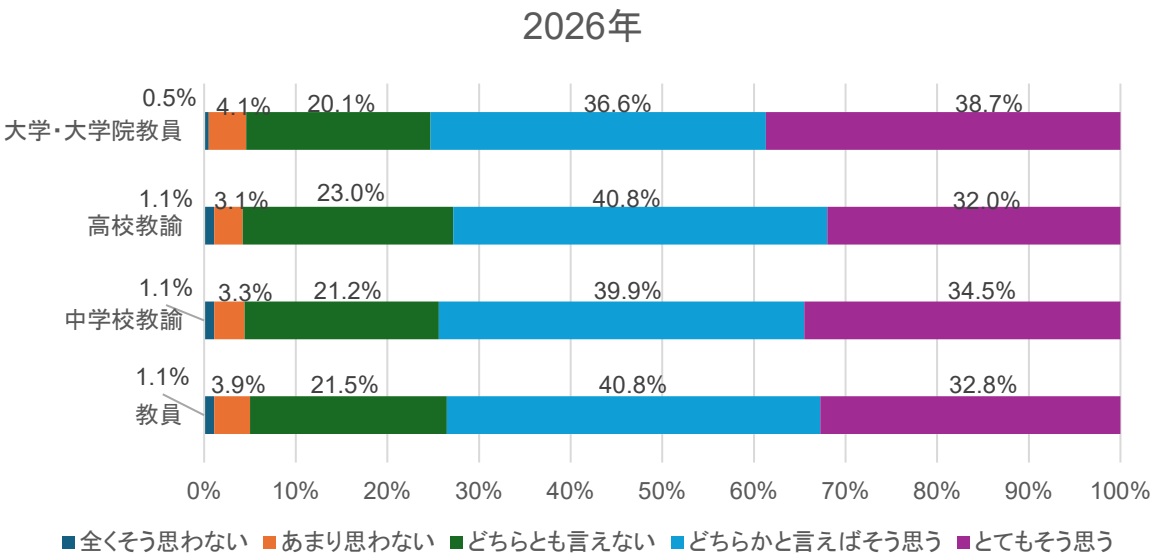


3年間比較

年	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とてもそ う思う
2026年 (n=2,384)	1.4%	4.8%	23.3%	40.6%	29.8%
2025年 (n=2,506)	1.4%	4.3%	23.5%	40.9%	29.9%
2024年 (n=2,616)	1.6%	5.2%	23.8%	38.8%	30.7%

- ・「生成AIを使った不正行為をさせないための取り組みが必要」と考える教員（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、2024年72.5%、2025年72.5%、2026年73.6%と、3年間を通じて7割を超える高い水準で推移している。
- ・2026年を学校種別にみると、肯定回答は中学校教諭74.4%、高校教諭72.8%、大学・大学院教員75.3%で、いずれの学校種でも7割を超えた。
- ・特に大学・大学院教員では「とてもそう思う」が38.7%と最も高く、不正行為を防ぐための具体的な取り組みの必要性を強く認識している教員が多い。

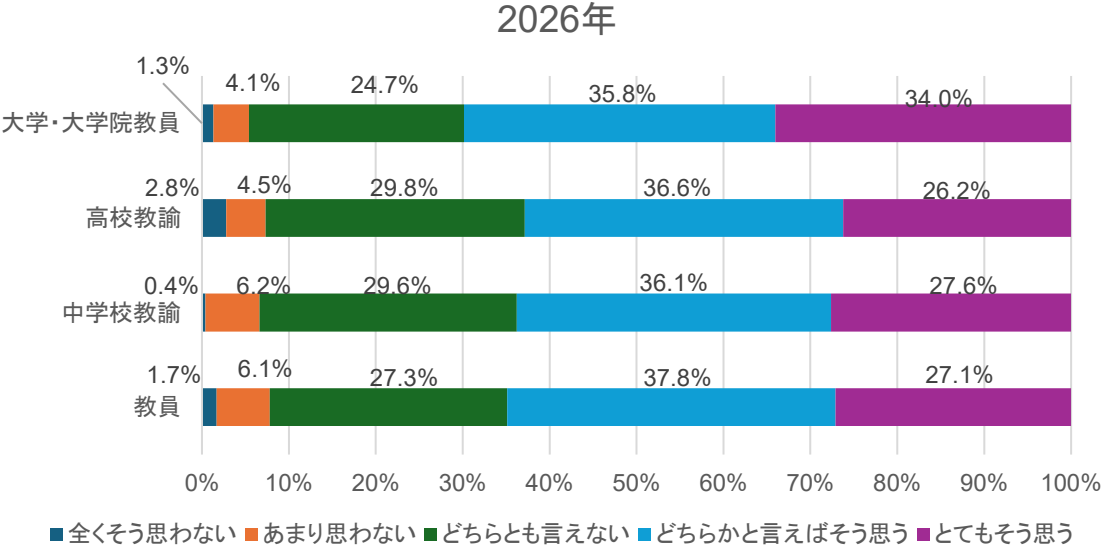
生成AIを使った不正行為をさせないようにするための取り組みが必要だと思う



3年間比較					
年	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と言え ばそう 思う	とてもそ う思う
2026年 (n=2,384)	1.1%	3.9%	21.5%	40.8%	32.8%
2025年 (n=2,506)	1.2%	4.2%	22.1%	41.1%	31.4%
2024年 (n=2,616)	1.5%	4.6%	21.4%	40.5%	32.0%

- ・「生成AIを利用できない状況での評価が重要」と考える教員（「どちらかと言えばそう思う」＋「とてもそう思う」）は、2024年62.0%、2025年63.4%、2026年64.9%と、3年間で緩やかに上昇した。
- ・2026年を学校種別にみると、肯定回答は中学校教諭63.7%、高校教諭62.8%、大学・大学院教員69.8%で、大学・大学院教員が最も高かった。
- ・大学・大学院教員では「とてもそう思う」が34.0%と、中学校教諭27.6%、高校教諭26.2%を上回っており、生成AIを利用できない状況での評価を重視する意識が比較的強い。

レポートではなく筆記試験にするなど、生成AIを利用できない状況での評価が重要だと思う



3年間比較					
年	全くそう 思わない	あまり思 わない	どちらと も言えな い	どちらか と 言え ば そう 思う	とてもそ う 思う
2026年 (n=2,384)	1.7%	6.1%	27.3%	37.8%	27.1%
2025年 (n=2,506)	1.5%	6.3%	28.9%	38.4%	25.0%
2024年 (n=2,616)	2.1%	5.5%	30.4%	36.2%	25.8%

学生の生成AIを利用した 学習上の問題行動と課題

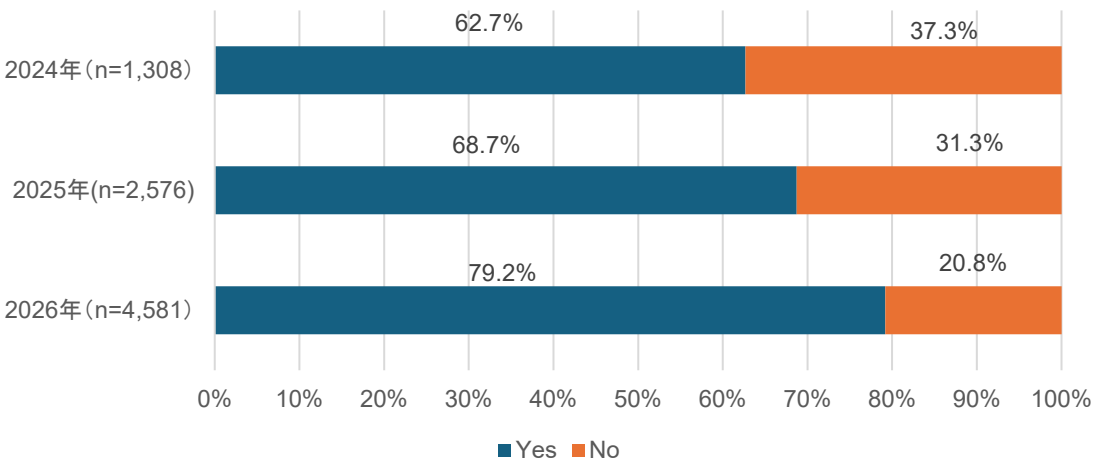
- ・ 生成AI利用学生のうち、課題やレポート作成に生成AIを使用した経験がある割合は、2024年62.7%、2025年68.7%、2026年79.2%と3年連続で上昇した。2024年から2026年では16.5ポイント増加している。
- ・ 特に2025年から2026年にかけては68.7%から79.2%へ10.5ポイント上昇し、2026年には生成AI利用学生の約8割が課題やレポート作成に生成AIを使用した経験を持つ。
- ・ 2026年を学校種別にみると、高校生77.6%、大学・大学院生81.4%で、大学・大学院生が3.8ポイント高いものの、いずれも8割前後に達している。

課題やレポートを作成する際に、生成AIを使用したことがある

2026年

学校種別	Yes	No
高校生 (n=2,126)	77.6%	22.4%
大学・大学院生 (n=2,147)	81.4%	18.6%

3年間比較



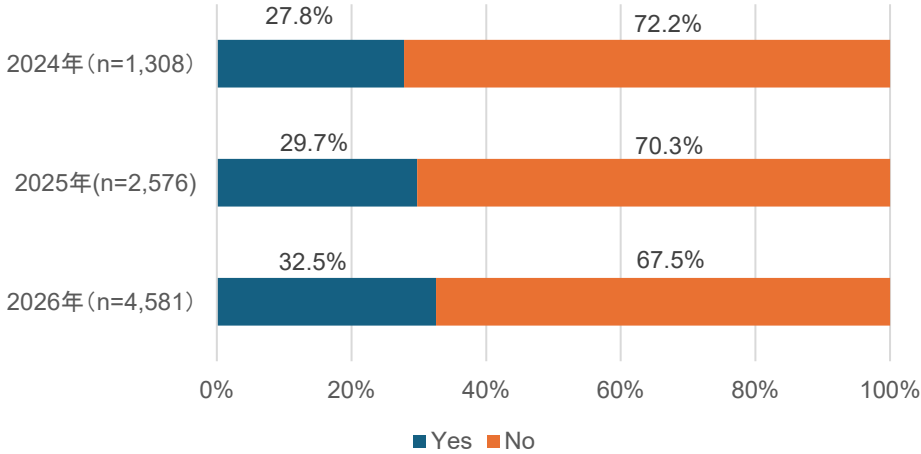
- ・ 生成AIの出力結果をコピー＆ペーストして提出した経験がある学生は、2024年27.8%、2025年29.7%、2026年32.5%と3年連続で上昇した。2024年から2026年では4.7ポイント増加している。
- ・ 2026年には生成AI利用学生の約3人に1人がコピー＆ペーストで提出した経験を持っており、「No」は67.5%であった。
- ・ 学校種別では、高校生33.9%、大学・大学院生30.6%で、高校生が3.3ポイント高かった。生成AIの利用拡大とともに、出力をそのまま提出する行動も増加している。

生成AIが出力した結果をコピー＆ペーストして提出したことがある

2026年

学校種別	Yes	No
高校生 (n=2,126)	33.9%	66.1%
大学・大学院生 (n=2,147)	30.6%	69.4%

3年間比較



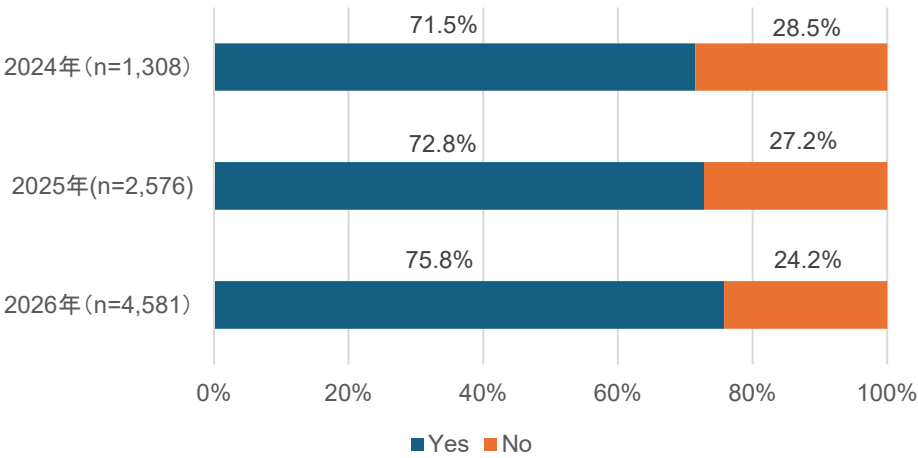
- ・「生成AIが出力した結果をコピー＆ペーストして提出することは不正行為である」と知っている学生は、2024年71.5%、2025年72.8%、2026年75.8%と3年連続で上昇した。
- ・2026年には生成AI利用学生の約4人に3人が不正行為に当たることを認識している一方、24.2%は「知らない」と回答しており、なお一定数に認識の不足が残っている。
- ・学校種別では、高校生71.0%に対して大学・大学院生は81.2%で、10.2ポイントの差がみられた。大学・大学院生の方が、コピー＆ペースト提出を不正行為と認識する割合が高い。

生成AIが出力した結果をコピー＆ペーストして提出することは不正行為であることを知っている

2026年

学校種別	Yes	No
高校生 (n=2,126)	71.0%	29.0%
大学・大学院生 (n=2,147)	81.2%	18.8%

3年間比較



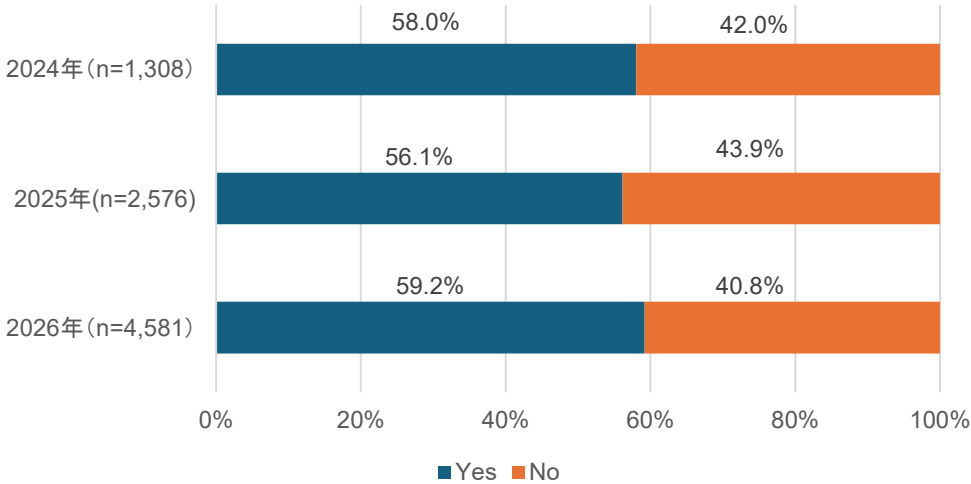
- ・「生成AIを使用した場合、どのような行為が不正行為に当たるか判断できる」と回答した学生は、2024年58.0%、2025年56.1%、2026年59.2%で、3年間を通じて6割前後で推移している。
- ・2026年は59.2%と3年間で最も高かった一方、40.8%は「判断できない」と回答しており、不正行為の具体的な判断基準について十分に理解していない学生も少なくない。
- ・学校種別では、高校生52.9%に対して大学・大学院生は66.0%で、13.1ポイントの差がみられた。コピー＆ペースト提出が不正行為であるという認識だけでなく、具体的な利用場面で適否を判断する力には学校種別による差がある。

生成AIを使用した場合、どのような行為が不正行為に当たるか判断できる

2026年

学校種別	Yes	No
高校生 (n=2,126)	52.9%	47.1%
大学・大学院生 (n=2,147)	66.0%	34.0%

3年間比較



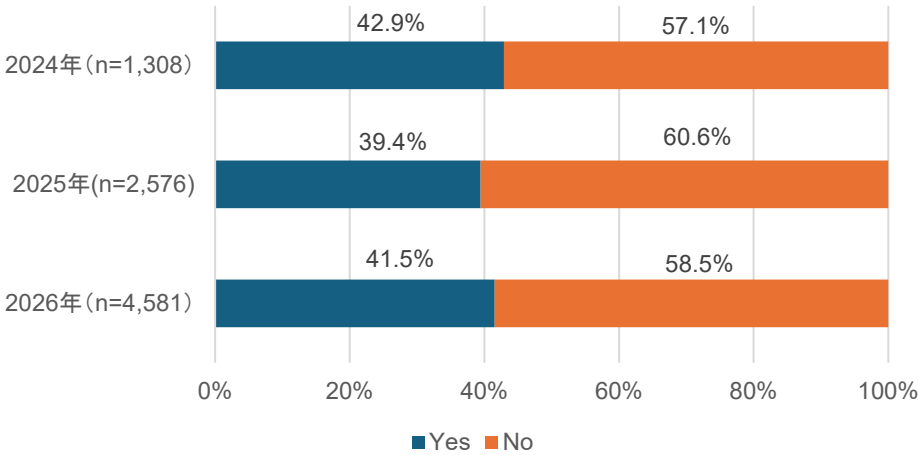
- ・「生成AIが書いた文章の引用の仕方を知っている」と回答した学生は、2024年42.9%、2025年39.4%、2026年41.5%で、3年間を通じて4割前後にとどまっている。
- ・2026年でも「知らない」と回答した学生は58.5%で、生成AIを利用する学生が増える中でも、AI生成文章の適切な引用方法に関する知識は十分に広がっていない。
- ・学校種別では、高校生41.8%、大学・大学院生40.8%でほぼ同水準であり、引用方法に関する知識の不足は特定の学校種に限られた問題ではないことがうかがえる。

生成AIが書いた文章の引用の仕方を知っている

2026年

学校種別	Yes	No
高校生 (n=2,126)	41.8%	58.2%
大学・大学院生 (n=2,147)	40.8%	59.2%

3年間比較



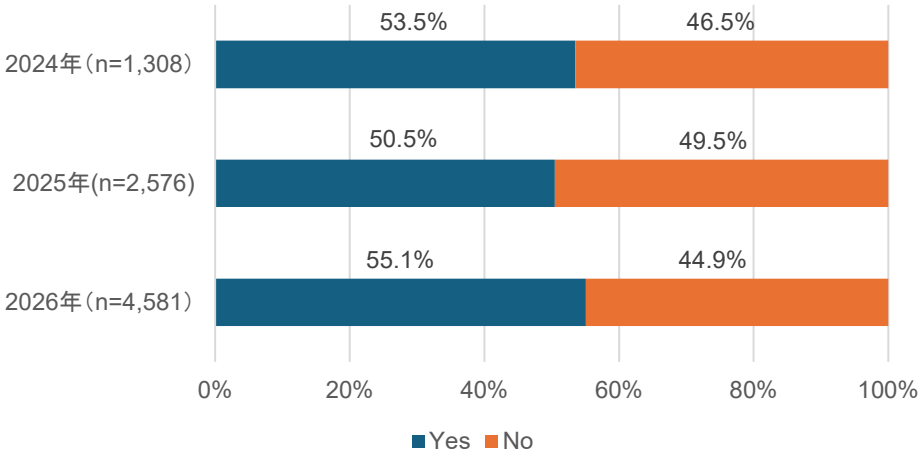
- ・「生成AIを不正行為に当たらないよう適切に使える自信がある」と回答した学生は、2024年53.5%、2025年50.5%、2026年55.1%で推移し、2026年が3年間で最も高かった。
- ・一方、2026年でも44.9%は「自信がない」と回答しており、生成AIを適切に利用することへの自信は、学生全体に十分定着しているとはいえない。
- ・学校種別では、高校生53.4%、大学・大学院生57.7%で、大学・大学院生が4.3ポイント高かった。生成AIの利用経験が広がる中で、適切な利用に関する知識だけでなく、実際に判断して使う力を高めることも課題となっている。

自分は生成AIを使った場合、不正行為に当たらないように適切に使える自信がある

2026年

学校種別	Yes	No
高校生 (n=2,126)	53.4%	46.6%
大学・大学院生 (n=2,147)	57.7%	42.3%

3年間比較



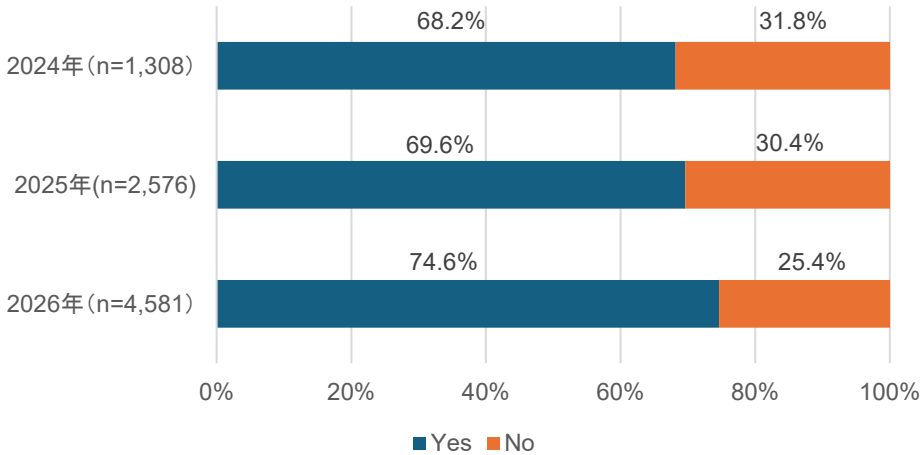
- ・「生成AIの出力結果には偏り（バイアス）が生ずることを知っている」学生は、2024年68.2%、2025年69.6%、2026年74.6%と上昇し、2026年が3年間で最も高かった。
- ・2026年は生成AI利用学生の約4人に3人がバイアスの存在を認識している一方、25.4%は「知らない」と回答しており、なお一定数に知識の不足がみられる。
- ・学校種別では、高校生71.8%、大学・大学院生78.2%で、大学・大学院生が6.4ポイント高かった。生成AIの利用拡大とともに、出力結果をそのまま受け取らず、偏りの可能性を意識する知識も広がっている。

生成AIの出力結果には、偏り（バイアス）が生ずることを知っている

2026年

学校種別	Yes	No
高校生 (n=2,126)	71.8%	28.2%
大学・大学院生 (n=2,147)	78.2%	21.8%

3年間比較



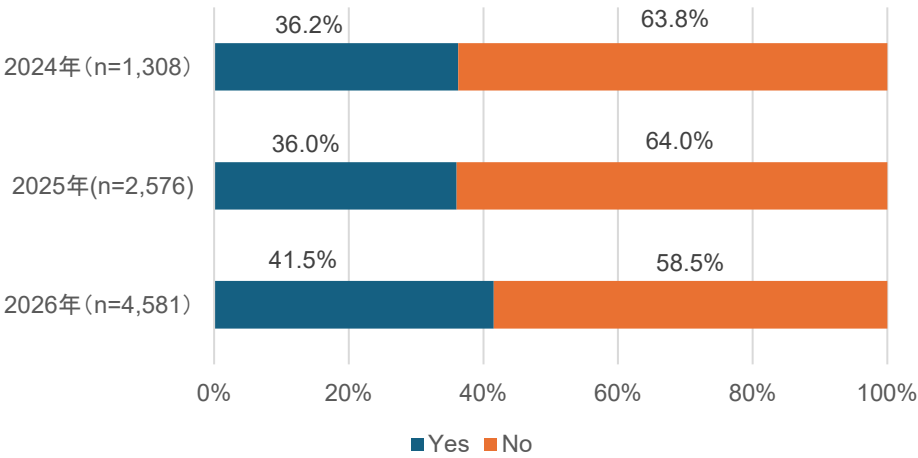
- ・「生成AIが書いた内容が正しいかを確認するファクトチェックのやり方を知っている」学生は、2024年36.2%、2025年36.0%、2026年41.5%となり、2026年に上昇した。
- ・一方、2026年でも58.5%は「知らない」と回答しており、生成AIの出力を検証するための具体的な方法知らない学生が半数を超えている。
- ・学校種別では、高校生36.1%に対して大学・大学院生は47.7%で、11.6ポイントの差がみられた。ファクトチェックに関する知識は改善傾向にあるものの、学校種別による差と全体的な知識不足が残っている。

生成AIが書いた内容が正しいかを確認するファクトチェックのやり方を知っている

2026年

学校種別	Yes	No
高校生 (n=2,126)	36.1%	63.9%
大学・大学院生 (n=2,147)	47.7%	52.3%

3年間比較



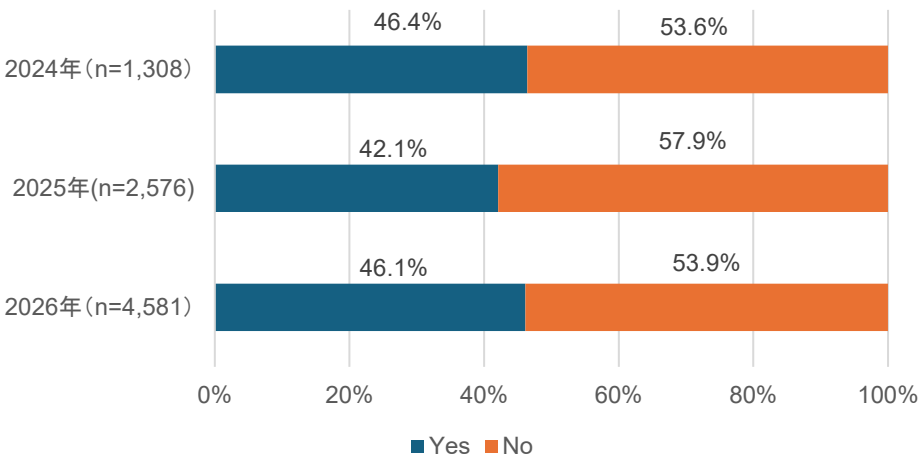
- ・生成AIの利用規約に年齢制限や保護者同意の条件があることを知っている学生は、2024年46.4%、2025年42.1%、2026年46.1%で、3年間を通じて半数を下回っている。
- ・2026年は2025年から4.0ポイント上昇したものの、53.9%は「知らない」と回答しており、利用年齢や保護者同意に関する規約の認知は十分とはいえない。
- ・学校種別では、高校生46.3%、大学・大学院生45.6%とほぼ同水準であり、年齢層の違いによる大きな差はみられなかった。

生成AIの利用規約では、年齢制限や保護者の同意が求められていることを知っている

2026年

学校種別	Yes	No
高校生 (n=2,126)	46.3%	53.7%
大学・大学院生 (n=2,147)	45.6%	54.4%

3年間比較



1. 利用の普及を、学びの質の向上につなげる。

2026年の生成AI利用学生では、引用方法とファクトチェック方法を「知っている」と答えた割合が、いずれも41.5%にとどまる。利用できることと、適切に判断して使えることは分けて考える必要がある。授業では、AIから答えを得ること自体を目標とせず、問いを立て、根拠を確かめ、自分の言葉で説明する過程を重視する。利用頻度や成果物の完成度だけでなく、本人が何を理解し、判断できるようになったかを確かめることが重要である。

2. 成果物だけでなく、本人の思考と判断を評価する。

課題ごとにAI利用を認めるか否か、認める場合の利用の範囲、引用・開示方法、評価基準を事前に示し、下書き、修正理由、口頭説明などから本人の理解を確かめる。AIの出力を比較し、誤りや偏りを検討して書き直す活動と、AIを使わず基礎的な知識・技能を確かめる活動を組み合わせる。評価の中心に据えるべきなのは、AIを使ったかどうかだけではなく、その出力をどう吟味し、何を自分で判断したかである。

3. 学校種に応じた支援と、共通する課題への対応を両立する。

ファクトチェック方法を知る利用学生は高校生36.1%、大学・大学院生47.7%である。高校では身近な課題を通じた情報検証の演習を充実させ、大学・大学院では専門分野の根拠確認や研究倫理に即した指導を進める。一方、引用方法を知る割合は両者とも約4割であり、学校段階にかかわらず継続的な指導が必要である。ルールを伝えるだけでなく、実際に引用し、検証し、その判断を説明する機会を設ける。

4. 安全な利用を、個人の注意だけに委ねない。

教員の知識不足を問題として挙げた教員は42.4%であり、生成AI利用学生の個人情報を入力経験も26.2%に達する。学校・大学は、利用を認めるサービス、入力してよい情報の範囲、設定の確認方法、相談先を明確にする。教員研修は操作説明だけで終わらせず、実際の教材や課題を用いて、誤った出力への対応や評価基準を教員同士で検討する場とする。個々の教員に判断を任せきりにせず、組織として支えることが求められる。

5. 教育支援の成果を、実際の学びから検証する。

本調査が示す利用状況や自己申告による知識・自信だけでは、AI利用によって理解や判断の力が向上したかまでは判断できない。今後は利用率の追跡に加え、引用・検証の実技課題や本人による説明を通じて、教育支援の効果を確かめる必要がある。AIに任せる作業と学習者自身が考える部分を学習目的に応じて設計し、AIを使って探究を広げる力と、AIなしでも説明・判断できる力の両方を育てる教育を目指す。

学生と教員を対象とした生成AIの教育利用状況と意識に関する 2026年全国調査 — 2024年～2026年比較調査 —

発行日：2026年10月

発行者：仙台大学

〒989-1605 宮城県柴田郡柴田町船岡南2丁目2-18

電話：0224-55-1121

担当：仙台大学体育学部スポーツ情報マスメディア学科AI教育研究チーム
